兵庫県文化財調査報告　第445冊

朝来市

宮ノ谷古墳群 Ⅱ

－ 県道改良事業　一般県道檜倉山東線に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 Ⅱ －

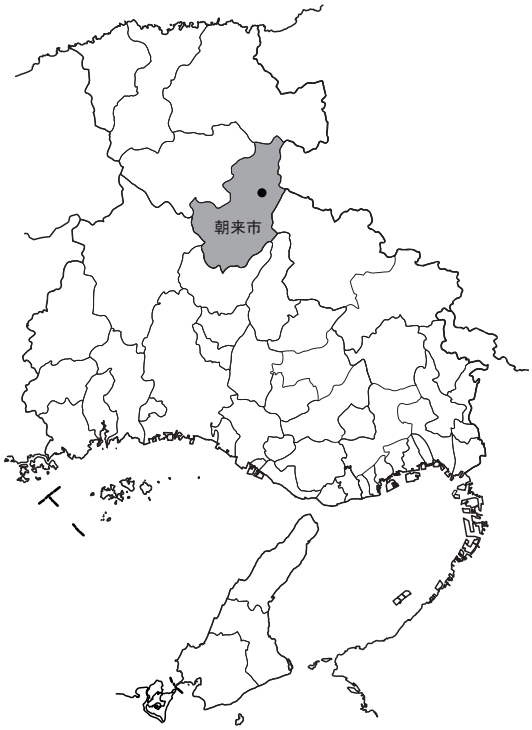
平成25（2013）年3月

兵庫県教育委員会

朝来市

宮ノ谷古墳群 Ⅱ

－ 県道改良事業　一般県道檜倉山東線に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 Ⅱ －



平成25（2013）年3月

兵庫県教育委員会

宮ノ谷古墳群遠景（南上空から）

宮ノ谷古墳群遠景（東上空から）

宮ノ谷古墳群遠景（北東上空から）

宮ノ谷古墳群調査区全景（東上空から）

調査区全景（東から）

調査区主要部（東から）

56 号墳主体部全景（北から）

56 号墳主体部礫床の状況（東から）

57 号墳主体部石棺蓋石の状況（東から）

57 号墳主体部石棺内の状況（南から）と出土勾玉

58 号墳の位置と残存状況（東から）

58 号墳全景（南から）

経塚の石組と土器片出土状況（東から）

経塚の石組と容器底部の出土状況（南から）

経塚内土師器筒形容器底部出土状況（東から）

経塚出土土師器筒形容器

例　言・凡　例

1．　本書は朝来市山東町柊木に所在する、宮ノ谷古墳群（56～58号墳）の発掘調査報告書である。

2．　本発掘調査は、県道改良事業（一般県道檜倉山東線）に伴うもので、兵庫県但馬県民局養父土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立博物館が実施した。

　また、出土品整理・調査報告書作成作業は、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。

3．　宮ノ谷古墳群の発掘調査のうち、確認調査は平成15（2003）年度に実施し、本発掘調査は平成22（2010）年度にそれぞれ実施した。発掘調査期間・担当者および兵庫県が設定した遺跡調査番号は以下のとおりである。

　確認調査　　平成15年５月13日～平成15年６月30日　（遺跡調査番号：2003006）

　　実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

　　担当者：調査第１班　別府洋二・平田博幸

　本発掘調査　　平成22年10月６日～平成22年11月30日　（遺跡調査番号：2010178）

　　実施機関：兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

　　担当者：調査第１課　岸本一宏・長濱誠司

4．　発掘調査にあたっては、株式会社山本組に工事委託して実施し、調査区の空中写真測量は株式会社ウエスコに委託して実施した。また、遺構実測の大半は調査補助員の山本亮司がおこなった。

5．　出土品整理（報告書作成）事業は平成24（2012）年度に実施した。実施期間・機関は以下のとおりである。

　平成24（2012）年４月１日～平成25（2013）年３月31日

　公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部

6．　本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したものを、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託して撮影したものを使用した。

7．　宮ノ谷56号墳出土礫の石材同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

8．　本書の執筆は、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部の岸本一宏がおこない、編集は、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部非常勤嘱託員の宮田麻子の協力を得て岸本がおこなった。

9．　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

10．　発掘調査・報告書作成にあたり、地元自治会をはじめ以下の方々・機関のご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表します（順不同敬称略）。

田畑　基・中島雄二・西山俊介

本 文 目 次

第１章　はじめに
第１節　遺跡をとりまく環境
１．地理的環境 …… 1
２．歴史的環境 …… 2
第２節　調査の経緯・経過
１．発掘調査 …… 6
２．出土品整理 …… 8
第２章　調査結果
第１節　調査区の概要 …… 9
第２節　検出遺構と出土遺物
１．56号墳…… 10
２．57号墳…… 11
３．58号墳…… 12
４．経　塚 …… 13
３．平坦部 …… 14
第３章　総　括
第１節　土師器筒形容器について …… 15
第２節　56号墳主体部礫床礫の石材同定 …… 18
第３節　総　括 …… 20

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版 1 上　宮ノ谷古墳群遠景（南上空から）
下　宮ノ谷古墳群遠景（東上空から）
巻頭写真図版 2 上　宮ノ谷古墳群遠景（北東上空から）
下　宮ノ谷古墳群調査区全景（東上空から）
巻頭写真図版 3 上　調査区全景（東から）
下　調査区主要部（東から）
巻頭写真図版 4 上　56号墳主体部全景（北から）
下　56号墳主体部礫床の状況（東から）
巻頭写真図版 5 上　57号墳主体部石棺蓋石の状況（東から）
下　57号墳主体部石棺内の状況（南から）と出土勾玉
巻頭写真図版 6 上　58号墳の位置と残存状況（東から）
下　58号墳全景（南から）
巻頭写真図版 7 上　経塚の石組と土器片出土状況（東から）
下　経塚の石組と容器底部の出土状況（南から）
巻頭写真図版 8 上　経塚内土師器筒形容器底部出土状況（東から）
下　経塚出土土師器筒形容器

挿図目次

第 1 図　周辺の古墳～奈良時代遺跡 …… 3
第 2 図　茶すり山古墳 …… 5
第 3 図　宮ノ谷古墳群等分布状況模式図 …… 7
第 4 図　土師器筒形容器の類例 …… 16
第 5 図　宮ノ谷56号墳主体部礫床礫石材 …… 19

表目次

第 1 表　周辺の古墳～奈良時代遺跡名表 …… 4
第 2 表　石材鑑定結果 …… 18

図版目次

図版 1　宮ノ谷古墳群 調査区位置・調査前地形測量図
図版 2　宮ノ谷古墳群 調査後全体図
図版 3　宮ノ谷56号墳
図版 4　宮ノ谷57号墳
図版 5　宮ノ谷58号墳（1）
図版 6　宮ノ谷58号墳（2）
図版 7　宮ノ谷Ⅱ経塚
図版 8　出土土器

写真図版目次

写真図版 1 上左　調査前全景（東から）
上右　調査前全景（南から）
下　調査後全景（真上から・右が北）
写真図版 2 上　56号墳主体部（東から）
①　56号墳主体部埋土断面（北から）
②　56号墳墓壙内鉄器出土状況（北から）
③　56号墳刀子出土状況詳細（西から）
④　56号墳墓壙全景（北から）
写真図版 3 ①　57号墳石棺蓋石の状況（南から）
②　57号墳石棺身全景（南から）
③　57号墳石棺北側短側石（南から）
④　57号墳石棺南側短側石（北から）
写真図版 4 ①　57号墳石棺蓋石除去直後の状況（西から）
②　57号墳石棺外側の状況（西から）
③　57号墳石棺内勾玉出土状況（東から
④　57号墳墓壙全景（西から）
下　58号墳墓壙全景（南から）
写真図版 5 ①　58号墳周溝埋土断面（南東から）
②　58号墳石室石材散乱状況（南から）
写真図版 5 ③　58号墳石室壁体遺存状況（東から）
④　58号墳石室壁体（南から）
⑤　58号墳石室壁体（南側低位置から）
⑥　58号墳墳丘断割り状況（南東から）
⑦　58号墳墳丘北側断割り断面（東から）
⑧　58号墳墳丘除去後全景（南西から）
写真図版 6 ①　経塚掘形底部付近の礫（南東から）
②　経塚掘形全景（北東から）
③　平坦部断割り断面（西から）
④　調査前全景（北東から）
⑤　人力掘削状況（北西から）
⑥　57号墳石棺実測状況（西から）
⑦　地元説明会開催状況（北西から）
⑧　掘削工事完了後の状況（南から）
写真図版 7 上　出土土器（1）
中　出土土器（2）
下左　56号墳主体部出土鉄刀子
下右　平坦面出土古銭
写真図版 8　経塚出土土師器筒形容器・蓋

報告書抄録

ふりがな	みやのたに こふんぐん
書　　名	宮ノ谷古墳群 Ⅱ
副　書　名	道路改良事業 一般県道檜倉山東線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第４４５冊
編著者名	岸本一宏・パリノサーヴェイ株式会社
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所　在　地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内）℡079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650－8567 兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号 ℡078－362－3784
発行年月日	平成２５（2013）年３月28日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号 ℡079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号			（遺跡調査番号）	（㎡）	
みやのたに こふんぐん 宮ノ谷 古墳群	あさごしさんとうちょう ひいらぎ 朝来市山東町柊木	28225	740752 740753 740754	35° 17′ 45″	134° 52′ 33″	20101006 ～20101130 （2010178）	568㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ谷 古墳群	古墳 経塚	古墳時代 中～後期	宮ノ谷56号墳 宮ノ谷57号墳 宮ノ谷58号墳	鉄刀子 滑石製勾玉 須恵器	主体部は木棺直葬 主体部は小石棺 主体部は石室
		中世	経塚１	土師器（筒形容器）	石組

要　約

本発掘調査の結果、確認調査時に発見された２基の古墳も含めて新たに４基（宮ノ谷55～58号墳）の古墳を確認し、そのうちの３基（56～58号墳）が道路工事範囲内の丘陵斜面に存在していた。宮ノ谷56号墳は墳丘の約1/3が土取りにより削られており、かろうじて木棺直葬の主体部が残存していた。鉄刀子が副葬されており、棺内には疎らな礫床が認められた。刀子の型式から５世紀後半～６世紀初頭の古墳時代中期後半～後期初頭頃の築造と推定される。宮ノ谷57号墳は墳丘をほとんど有さないと思われ、箱式石棺を内部主体としていた。石棺の内法長が75㎝と小さく、棺内に小形の滑石性勾玉１点副葬されていたことから、被葬者は女児と思われる。時期は56号墳と同様の古墳時代中期後半～後期初頭頃の築造と推定される。宮ノ谷58号墳は墳丘と石室の大半が破壊され、東半分が斜面下に崩落していた。円形に近い墳形と推定され、横穴式石室または竪穴系横口式石室を内部主体としていた。副葬品は遺存していなかったが、周辺出土土器から古墳時代後期前半の築造と推定される。

経塚と想定している遺構は、円形土壙の端に寄った位置に石組みがなされ、内部に土師器筒形容器を納めたもので、調査時にはかなり破壊を受けていた。土師器筒形容器は丹後地域を中心に但馬地域でも認められるもので、中世前期と推定される。

第１章　はじめに

第１節　遺跡をとりまく環境

１．地理的環境

宮ノ谷古墳群は、朝来市東部で朝来市山東町域中央部の「山東盆地」南西縁辺に位置する。

朝来市は旧朝来郡の４町が平成17（2005）年に合併して誕生したが、朝来町以外は旧町の呼称名をそのまま残している。遺跡が存在する朝来市は、東側の一部が京都府と境を接し、兵庫県北部の旧「但馬国」の南東部にあたり、同様に南は「播磨国」、東は「丹波国」と境を接している。

朝来市のほぼ中央部には但馬最大の河川である円山川が北流し、和田山町中心部でその方向を北西に大きく変えるが、その流域に小盆地や谷部が存在している。

朝来市内東部に位置する山東町の中心部分をなす山東盆地は、東西に長い横向きの「Ｌ」字形に近い形状を呈するが、その中の西部では三保川、与布土川が北流し、東部では柴川、粟鹿川が西流している。これらの河川は山東盆地北西部で磯辺川と合流し、与布川の名称で円山川屈曲部につながる。

朝来市は古代山陰道と「但馬道」と称される道路の合流地点であるが、現在は京都府から国道９号線が朝来市内の山東町・和田山町を通り、国道427号線が丹波市から遠阪峠を越えて山東町で国道９号線と合流する。一方、姫路市につながる国道312号線は和田山町で国道９号線と合流し、但馬最大の河川である円山川も国道312号線に沿って北流し、和田山町中心部で北西方向に流れを変え日本海に注ぐ。

古代山陰道は国道427号線とほぼ並行して丹波から遠阪峠を越え、同様に国道312号線と並行する「但馬道」と和田山町中心部付近で合流するようである。

このように、朝来市内でも和田山町・山東町域は古代からの主要道路の接点が存在し、円山川も含めて陸運・舟運の要衝の地であったことが容易に判断できる。

円山川は、朝来市和田山町中心部での流れの方向が変わる地点で山東町側から流れ込む与布土川と合流する。その与布土川も山東町北西部でいくつかの小河川と合流しているが、それら小河川の流域は盆地状地形を呈している。山東盆地の南北にのびる平地部分の西端を北流するのが与布土川で、標高962ｍの粟鹿山の懐にその源を発している。一方、三保川は山東盆地西部の平地東端を北流するが、「Ｌ」字形を呈する山東盆地の屈曲部において、東西に長い平地部分の南端を西流してきた粟鹿川と合流して盆地を北西方向に横断する。この粟鹿川も盆地北部において、東西に長い平地部分の北端を西流してきた柴川と合流する。さらに前述の磯部川と合流し、盆地北西端で与布土川と合流し、さらに和田山盆地で円山川と合流する。

さて、宮ノ谷古墳群が築造された丘陵尾根は、表土を除去した面では岩盤が風化した土壌であった。ただし、古墳盛土中には旧表土面も認められたが、その下部には岩盤風化土壌が存在していた。深い遺構を掘削すると、遺構内下部には岩盤風化土下部に存在する岩盤層が現われたことから、丘陵の根幹をなすのは岩盤であり、丘陵尾根表面は岩盤風化土に覆われていたことが判明した。その岩盤層は、橙色から赤褐色を呈する軟質のもので、山東盆地周囲の山塊でよく見られるものである。

この岩盤は、主に古第三紀に形成された山陰帯に属する花崗岩で、分布する主な岩体の地域により、当該地域のものは和田山花崗岩（Gw）と呼ばれ、和田山町を中心として東西約18km、南北約８kmの長

円形をした岩帯であり、生野層群に対して接触変成を与えているものであるといわれる。和田山花崗岩は、塊状で淡紅色を呈し、主に細粒～中粒の黒雲母花崗岩からなるとされているものである。

なお、生野層群は山陰帯の火山岩類で、兵庫県北部日本海側を中心に分布し、約１億年前の白亜紀末期～古第三紀にわたる火山活動によって形成された流紋岩および安山岩質の火山岩・火山砕屑岩で、舞鶴帯以南に分布するものを生野層群と呼称されている。

２．歴史的環境

山東盆地内および盆地に面した丘陵部には多数の集落跡・古墳などが存在しているが、西側の平野部に面した東西丘陵端や盆地中の小丘陵上には多数の前半期古墳が集中的に存在している。特に、盆地の屈曲部に位置する柿坪遺跡の南東側に存在する山塊には尾根を埋め尽くすように多数の古墳が密集して存在している。また、山東盆地西部では、西側の丘陵から平野部に向かって多数の尾根がのびており、その尾根上にも多数の前半期古墳が存在している。それらのうち、南部の小丘陵上に存在するのが宮ノ谷古墳群で、現在確認できる総数は58基で構成されている。

宮ノ谷古墳群が存在する朝来市山東町周辺には、各時代にわたって数多くの遺跡が存在しており、それらについては北近畿豊岡自動車道関連の各報告書において述べられているため、以下では本古墳群に直接関連する古墳時代および直後の奈良時代に限った周辺の歴史的環境について述べることとする。

周辺の古墳時代遺跡

古墳時代の集落跡は柿坪遺跡（106）や山東盆地内東部に位置する粟鹿遺跡で前期以降大規模なものが営まれており、加都遺跡（36）も中期以降の大規模な集落跡である。また、宮ノ本遺跡群（44）では古墳時代前期の竪穴住居跡２棟が検出され、和田山町筒江中山遺跡（34）でも前期の竪穴住居跡が検出されている。一方、和田山町筒江大垣（浦石）遺跡（31）では前期初頭頃の粘土採掘壙が調査されている。柿坪遺跡では古墳時代中期の大型掘立柱建物跡が複数棟検出されており、但馬最大の古墳時代集落である。初期須恵器も多数出土していることから、首長居館と推定されている。なお、永徳遺跡（105）では古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されている。

墳墓では古墳時代前期初頭の小規模墳が若水古墳群（91）で発見されているが、盟主墳である若水古墳（90）は長径約40m、高さ約５ｍの円形墳墓で、長大な棺のなかに銅鏡２点が副葬されていた。鏡のひとつは２世紀後半に中国で製作された飛禽鏡で、古墳の築造時期も大きくは降らないものと推察される。新堂見尾１号墳（83）の第１主体部は石室系石棺で、重圏文鏡や剣・鉇が副葬され、円山川西岸に位置する和田山町向山２号墳でも同構造の第２主体部に、破砕された内行花文鏡が置かれていた。出土土器と鏡の型式から、ともに古墳時代前期の前半に相次いで築造されたものと考えられる。

古墳時代前期後半には和田山町城の山古墳（46）が築造され、長大な木棺内に三角縁神獣鏡をはじめ６面の鏡、石釧、石製合子、鉄刀、鉄斧などが副葬されていた。馬場19号墳（98）でも木棺内に方格規矩文鏡、東南山３号墳（３）の第３主体部木棺内に石釧が副葬されており、築造時期が近いものと思われる。なお、東南山２号墳第２主体部木棺内には珠文鏡が副葬されていた。また、和田山町秋葉山２号墳（51）はこの時期に、円山川西岸に接した丘陵上に位置する梅田東古墳群の10～14号墳はこの時期まで築造され、向山・市条寺古墳群や柿坪中山古墳群（107）ではこれ以降も古墳築造は続いている。なお、芝花26～28・73・74号墳（101）もこの頃に築造されている。

第１図　周辺の古墳～奈良時代遺跡

第１表　周辺の古墳～奈良時代遺跡名表

1	宮ノ谷古墳群	32	筒江梶原古墳群	63	岡田１号墳	94	五反田遺跡Ｂ
2	寺山古墳群	33	筒江中山古墳群	64	野村１号墳	95	馬場散布地Ｂ
3	東南山古墳群	34	筒江中山Ⅱ遺跡	65	西地古墳群	96	持谷古墳
4	城ノ越古墳群	35	中山遺跡	66	東河寺遺跡	97	越田宮之前遺跡
5	大月向山古墳群	36	加都遺跡(宮ヶ田地区)	67	堂山古墳	98	馬場古墳群
6	大将軍古墳群	37	長者谷古墳群	68	小川古墳群	99	柿坪向山古墳群
7	北大工山古墳群	38	比治向山古墳群	69	宮丸山古墳群	100	和賀向山古墳群
8	大工山古墳群	39	イノオク古墳群	70	宮古墳群	101	芝花古墳群
9	矢谷古墳群	40	法興寺跡	71	春の木田古墳群	102	芝花散布地Ａ
10	押坂古墳群	41	上エ山古墳群	72	くねり谷古墳	103	芝ヶ端古墳
11	又木谷古墳群	42	西山古墳群	73	くねり谷古墳群	104	芝ヶ端遺跡
12	喜多垣遺跡	43	恵谷遺跡	74	久田和１号墳	105	永徳遺跡
13	喜多垣古墳群	44	宮ノ本遺跡群	75	久田和２号墳	106	柿坪遺跡
14	打田２号墳	45	城ノ山裏古墳群	76	岡崎古墳	107	柿坪中山古墳群
15	森向山古墳群	46	城ノ山古墳	77	池の谷古墳群	108	越田段古墳群
16	打田古墳	47	池田古墳	78	ブロ山田古墳	109	越田四辻遺跡
17	池ノ端古墳群	48	観音山古墳群	79	水谷古墳	110	越田塚脇遺跡
18	迫間古墳群	49	寺谷古墳	80	江谷古墳群	111	越田塚脇古墳
19	加都王塚古墳	50	林垣古墳群	81	石部神社古墳	112	椎ノ木古墳群
20	加都車塚古墳	51	秋葉山古墳群	82	空山古墳	113	越谷古墳群
21	但馬道	52	寺内オタケ山古墳	83	新堂見尾古墳群	114	南越谷古墳群
22	加都神社裏古墳群	53	岡田窯跡群	84	上竹散布地	115	恋谷遺跡
23	上山古墳	54	更杵古墳	85	ハス子古墳群	116	三保尾荒地古墳
24	連願寺古墳	55	大盛山古墳群	86	大師山古墳群	117	三保東山古墳
25	城ヤブ古墳群	56	小丸山古墳	87	楽音寺北山１号墳	118	堀所古墳群
26	城ヤブ１号墳	57	柳原１号墳	88	梶原遺跡	119	山根畑中古墳群
27	筒江古墳群	58	門在古墳群	89	和賀散布地	120	山根古墳群
28	長尾古墳群	59	柳原２号墳	90	若水古墳（Ａ11号）	121	三保向山古墳群
29	大月北山古墳群	60	岡田２号墳	91	若水古墳群	122	三保遺跡
30	茶すり山古墳	61	長塚古墳	92	切戸山古墳群		
31	筒江大垣遺跡	62	胄塚古墳	93	五反田１号墳		

古墳時代前期末～中期初頭には但馬最大の前方後円墳で、推定長135ｍの和田山町池田古墳（47）が築造され、埋葬施設には蓋石に彫刻のある長持形石棺が納められていたことが想定されている。和田山町筒江中山23号墳（33）もこの頃の築造と想定され、内行花文鏡が副葬されていた。なお、山東盆地東端に位置する方谷５号墳もこの時期である。

古墳時代中期中葉には最大径90ｍの大円墳で、多量の武器・武具が副葬された茶すり山古墳（30）が築造されており、円山川西岸の和田山町梅田古墳群が造墓を開始し、鏡や琴柱形石製品が出土した梅田１号墳をはじめ、持谷古墳（96）が築造されている。なお、梅田古墳群北側に存在する独立丘陵や粟鹿神社経塚が存在する円形マウンドも古墳時代中期の円墳である可能性が高い。

中期後半には旧朝来町桑市に所在する船宮古墳が築造されている。90ｍの前方後円墳で、須恵質の埴輪が出土している。内部主体は竪穴式石室と想定され、和田山町加都車塚古墳（20）も内部主体が竪穴式石室のようであり、中期後半の所産の可能性が高い。この時期の小規模墳では馬場17号墳（98）や向山５・６・11号墳および大月北山古墳群（29）、筒江中山24号墳（33）がある。

中期末～後期初頭には和田山町岡田古墳群が築造されるが、規模は小さくなり、盟主墳である長塚古墳（61）は全長70ｍの前方後円墳であり、胄塚古墳（62）や岡田２号墳（60）は径30ｍ前後の円墳である。埴輪を樹立した小規模墳では森向山古墳群（15）、芝ヶ端古墳（103）、和賀向山１号墳（100）があり、和賀向山１号墳は竪穴系横口式石室の可能性が高く、養父市観音塚古墳とも時期的にほぼ同じである。小規模な若水Ｃ３号墳（91）や鏡が出土した梅田３号墳のような木棺直葬墳および筒江中山26号墳（33）の竪穴式石室墳もこの時期であり、山東盆地南東端の櫛名谷古墳群もこの時期を中心としているようであるが詳細は不明である。

山東盆地内の古墳以外の遺跡には、柿坪遺跡や粟鹿遺跡などのほかに、越田四辻遺跡（109）や越田塚脇遺跡（110）などがある。これらは柿坪遺跡の首長を支えた有力者の集落であった可能性があり、その奥津城が周辺に存在する古墳であったのかもしれない。

その後、6世紀中葉以降の築造と思われる和田山町加都王塚古墳（19）はやや規模が大きく、横穴式石室の可能性が高いが、山東盆地東端の方谷1～4号墳のような木棺直葬墳も築造されている。

そして、これ以降横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が数多く築造されるようになる。しかし、山東盆地では南西部や南東部の地域に限られ、南西部では越田塚脇古墳（111）、三保尾荒地古墳（116）、三保東山古墳（117）、三保向山古墳群（121）や打田古墳（16）、打田2号墳（14）など少数が存在しているのみで、盆地内では前半期古墳に較べてその数が激減している。その一方で、盆地よりも西側の迫間の地に池ノ端古墳群（17）や迫間古墳群（18）において多数の横穴式石室墳が築造されていることから、南西側から山東盆地に入る街道が整備されたかにみえる。

また、加都遺跡の南東部において城ヤブ古墳群（25）が築造され、政治の中心が柿坪遺跡から加都遺跡に移ったかにみえるが、筒江古墳群（27）や長尾古墳群（28）の存在から、山東盆地に入る西からのルートも依然として存続していたようである。加都遺跡の北東には白鳳時代と考えられる法興寺跡（40）が存在し、加都遺跡の地名は「河津」につながる可能性があり、加都遺跡で古墳時代中期後半から後期の建物跡が集中する部分の字名が「宮ケ田（みやけだ）」であることや、その北側の市御堂の地名で「市」の存在が想定できることから、円山川東岸のこのあたりに河の津や市があり、ミヤケが置かれていた可能性（岸本2012）があろう。それは、古墳時代中期後半から後期以降に栄えた可能性があり、古墳時代中期中葉に遡ることも十分考えられよう。なお、時期は異なるが、但馬道（21）やそこから東にのびる枝道の存在も、古代山陰道との関係も含めて交通の要衝として重要な意味をもっていたことであろう。

山東盆地内の東端部に近い北側丘陵部には大同寺古墳群など横穴式でも新しい時期の古墳群があり、山東盆地の北西端から和田山盆地へ抜ける狭隘部には江谷古墳群（80）や水谷古墳（79）などの横穴式石室墳が出現しており、古代山陰道の推定路沿いに所在する点で、官道との関連で興味深い。

一方、古墳時代中期末～後期初頭に岡田古墳群が存在した岡田盆地内では、全長59mの前方後円墳で内部主体が横穴式石室と推定される小丸山古墳（56）をはじめ、盆地入り口にあたる南西部の山裾に柳原1・2号墳（57・59）などが存在し、盆地奥部である東部に宮古墳群（70）や春の木田古墳群（71）、池の谷古墳群（77）などの横穴式石室を内部主体とする古墳群や古墳が数多く築造され、盆地内の勢力が依然として強かったことを示しており、東河寺遺跡（66）が古墳時代集落跡としての可能性があり、有力者の勢力範囲として注意すべき地域となっている。

第２図　茶すり山古墳

最後に、今回の調査においても前回と同様、中世の経塚と思われる遺構を検出したが、盆地内では、東部の粟鹿神社本殿の後ろに存在する、大型円墳と思われる墳丘を利用した粟鹿神社経塚が有名である。

岸本一宏 2012「交通と伝達①湊・駅」『古墳時代の考古学』5　時代を支えた生産と技術　同成社

第２節　調査の経緯・経過

１．発掘調査

調査の経緯

兵庫県但馬県民局養父土木事務所による、県道改良事業－一般県道檜倉山東線－（県道檜倉山東線バイパス事業－発掘調査当時）のバイパス道路新設工事のうち、北端より朝来市山東町柊木集落北端西側までの部分については調査当時すでに完成していたが、柊木～喜多垣間は未着工となっている。また、文化財調査についても工事完了部分以南は本発掘調査が未着手の状況であった。

朝来市山東町柊木集落の西側山塊には宮ノ谷古墳群をはじめ寺山古墳群など数多くの古墳群が存在しており、平成15（2003）年度には今回調査の北側に所在する宮ノ谷古墳群１・２・７・９・49～54号墳、その前年度には寺山古墳群17・18号墳について、県道檜倉山東線の道路改良事業にともなって、兵庫県立考古博物館が本発掘調査を実施した。

工事予定範囲のうち文化財調査が未着手であった部分のうち、柊木集落の南西側丘陵尾根上には、宮ノ谷古墳群が北側から続いて存在しているが、今回の調査箇所にあたる部分については、平成15（2003）年５月～６月にかけて兵庫県教育委員会が確認調査を実施した。その結果、尾根突端から下がった位置にも古墳が存在していることを確認し、主体部と想定される落ち込みも検出した。

この結果をもとに養父土木事務所と協議した結果、道路工事により掘削をおこなう部分について、記録保存を前提とした本発掘調査を実施することとなった。なお、尾根突端に存在した古墳（宮ノ谷55号墳）については、工事の工法変更により掘削部分が縮小されたため、現状保存されることとなり、調査面積は工事により法面として掘削される丘陵端斜面の568㎡となった。

調査の方法

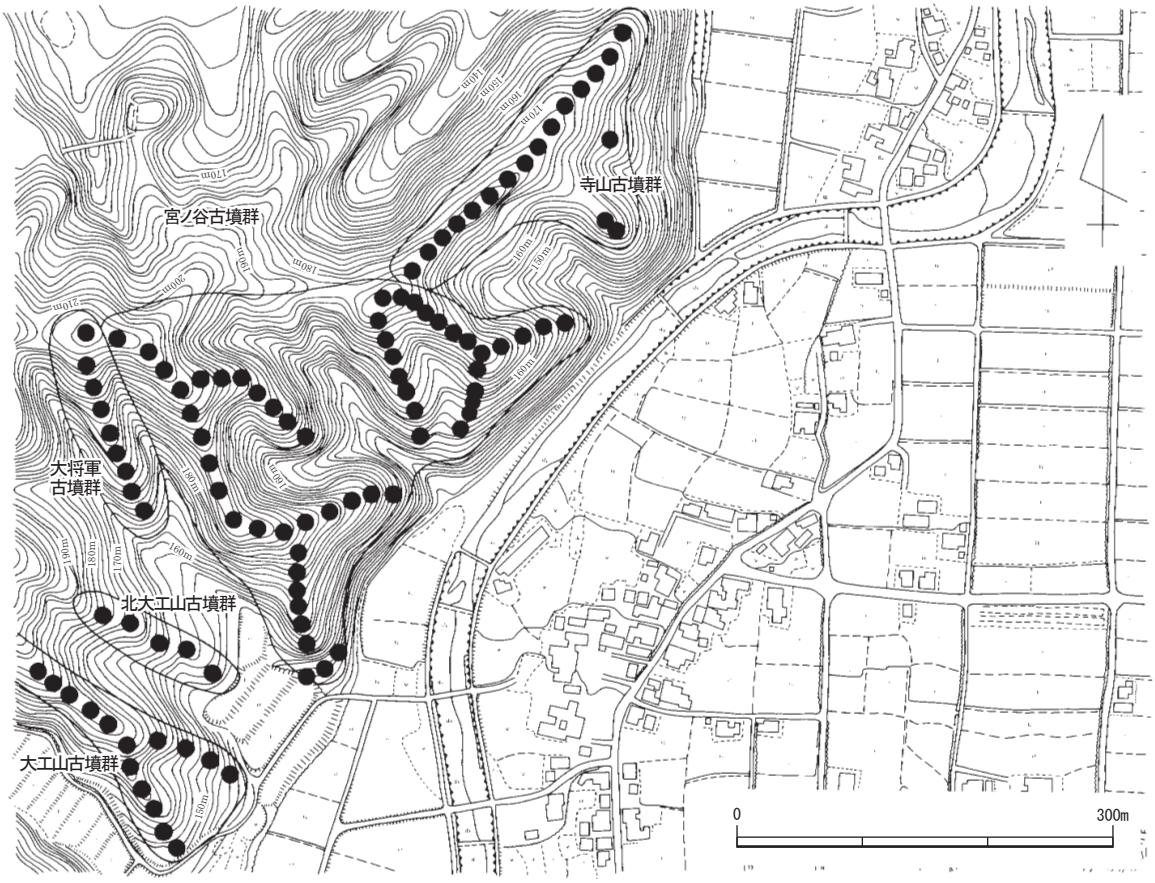
調査にあたっては、調査区である丘陵斜面部分に笹を中心として灌木なども茂っていたため、これらの伐開から開始した。伐開後は現況地形の空中写真測量を株式会社ウエスコに委託して実施し、100分の１縮尺の地形図を作成した。この地形図では、調査区最上部に存在する古墳（宮ノ谷56号墳）以外は墳丘を確認することができず、56号墳の斜面下約７ｍの位置に存在する平坦部を古墳と想定していたが、調査の結果、墳丘、主体部・墓壙などは検出されなかった。

本発掘調査前地形の空中写真測量終了後、表土掘削を開始し、地表面から古墳の残存墳丘上面や当時の地表面（遺構面）まで人力により掘削した。また、地表面から掘削下面までの土に含まれる遺物について回収に努めた。

遺構面まで掘削した後、表面を精査して墳丘・周溝や主体部といった遺構の検出をおこない、検出した遺構については人力による掘削をおこなった。その際には鉄器･玉類といった副葬品などを検出した。

古墳の主体部調査後には、空中写真測量を実施し、終了後には古墳の構築方法を明らかにするため、古墳の墳丘盛土を除去した。なお、掘削した際の残土はすべて調査区南東側崖下の道路用地内である休耕田に仮置きした。

検出した遺構のうち、古墳周溝および主体部については平面図実測と埋土断面の写真撮影・実測をおこない、広範囲の写真については高所作業車を使用して撮影をおこなった。また、調査区内全体の基準点設置および空中写真測量については、株式会社ウエスコに委託して実施した。



第３図　宮ノ谷古墳群等分布状況模式図

本発掘調査の結果、調査範囲内に３基の古墳が存在していたことが判明した。このうちの最上部に存在した１基は、確認調査時にすでに確認されていたものであるが、その他の２基の古墳については明確な墳丘を有していないものや、すでに破壊されていたもので、本発掘調査によって新発見となったものである。これらの古墳は、地元朝来市教育委員会と協議の結果、調査区内の丘陵上部に近いものから斜面下方に向かって順に、宮ノ谷56号墳、宮ノ谷57号墳、宮ノ谷58号墳と命名された。また、57号墳のすぐ上で土師器筒形容器を納めた石組を検出した。この遺構は、後世にかなり破壊されていたが、兵庫県但馬地域や京都府丹後地域で経塚とされることが多いものと同じ構造を示していたことから、経塚と判断した。これと同じ構造と判断される経塚は、前回の宮ノ谷古墳群の調査時にも出土していた（別府・平田他2010）ことから、宮ノ谷Ⅱ経塚と呼称する。

このように、明確な墳丘をもたない古墳は但馬地域でも多く認められ、前回の宮ノ谷古墳群の調査時にも尾根陵線上に存在する古墳が新たに多く見つかっており、朝来市教育委員会により詳細な古墳分布地図が作成されているが、実際に本発掘調査をすれば、この地図に記載されているよりもはるかに多くの古墳が発見されることは、前回および今回の本発掘調査で明白になった。特に、宮ノ谷57号墳のように墳丘をほとんど持たないものや、宮ノ谷58号墳のように墳丘が地滑りによって崖下に崩落したうえに、墳丘および石室が破壊されたような場合は、表面調査で古墳と判断することが全くできないものである。今後注意が必要であろう。

なお、57号墳の墳丘を除去し、主体部を墓壙まで掘削する前で、かつ57号墳の石棺解体前および58号墳の石室残存部の解体前という、見学者にも理解しやすい状態で遺存している段階の、発掘調査進行上

の適期である、平成22（2010）年11月21日に地元住民を対象とした説明会を実施した結果、約60名の方々が見学に来られた。このタイミングは、地元説明会を開催することを前提にして、３基の古墳および経塚を見学者に理解しやすい状態で残すように調査を進めた結果での適期でもある。

地元説明会開催後には、56号墳の墳丘除去および主体部の墓壙埋土を除去し、57号墳では石棺を解体して墓壙底まで埋土を掘削し、58号墳では石室の解体および墓壙の掘削と残存墳丘の除去を、経塚についても石組の解体と掘形埋土の除去をそれぞれおこない、墓壙等の写真撮影および平面・断面の実測図作成をおこなった後、調査を終了した。

２．出土品整理

出土品整理事業は平成24（2012）年度に実施した。

平成24（2012）年度は兵庫県立考古博物館の埋蔵文化財調査部門が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に移ったため、その機関で実施したが、実施場所は兵庫県立考古博物館であった。

作業内容・担当者は以下のとおりである。

平成24（2012）年度　　実施機関：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部　整理保存課

作業内容：水洗、ネーミング、接合・補強、復元、金属器保存処理、分析鑑定、実測・拓本、
写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷

作業担当職員：篠宮　正・深江英憲（作業進行管理）、岡本一秀（金属器保存処理）
岸本一宏（作業指示・編集・原稿執筆）、

作業担当非常勤嘱託員：荻野麻衣・菅生真理子・吉田優子（接合・補強、復元）
宮田麻子（実測・拓本、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト）
浜脇多規子・桂　昭子（金属器保存処理）

別府洋二・平田博幸他 2010『寺山古墳群 宮ノ谷古墳群 諏訪城跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告
第378冊　兵庫県教育委員会

第2章　調 査 結 果

第１節　調査区の概要

調査の結果、尾根稜線延長上にあたる調査区内のほぼ中央南寄りの南東－北西ライン上に古墳３基と経塚を検出し、調査区南東部では南北方向に平坦面を検出した。なお、確認調査時に道路予定地内に存在していた古墳については、道路計画の掘削部分縮小により調査区外に位置することとなっていた。

検出した古墳３基は、本発掘調査以前には確定したものではなかったことから、地元の朝来市教育委員会と協議をおこない、調査区内最上部に立地するものから下方に順に、宮ノ谷古墳群56号墳、同57号墳、同58号墳と呼称することとなった。また、調査区北西外の工事予定範囲の外に位置することとなった古墳については宮ノ谷古墳群55号墳と命名された。

以下、各古墳および経塚について調査結果を述べる。

調査区内の最上部に位置する宮ノ谷56号墳は、墳丘の南西側約1/3が土取りにより削られており、崖面となっていた。しかし、かろうじて木棺直葬の主体部が残存しており、鉄刀子が棺外副葬されていた。また、棺内には小さな川原石を撒いたように疎らに敷いて礫床としていた。この礫床の密度と副葬品の量には相関関係があるようで、礫床礫の量が多く厚く敷かれている場合には副葬品の量も多く、逆に副葬品が少ない場合は礫床礫の量も少ないようである。古墳の築造時期は、刀子の型式から５世紀後半～６世紀初頭の古墳時代中期後半～後期初頭頃の築造と推定される。

宮ノ谷57号墳は墳丘をほとんど有さないと思われ、自然石を組み合わせた箱式石棺を内部主体としていた。石棺の内法長は75㎝と小さく、棺内に小形の滑石製勾玉１点が副葬されていたことから、被葬者は女児と思われる。また、棺内の北端には小礫を２個置いていたことから、枕石として置かれたもので、北枕で埋葬されたことが窺える。時期は56号墳と同様の古墳時代中期後半～後期初頭頃の築造と推定される。

宮ノ谷58号墳は古墳の東半分が地滑りによって東側崖下に崩落しており、さらに、近世頃の畑地構築のために平坦面を造成する際の客土として墳丘と石室の大半が削り取られていた。残存墳丘の斜面山側には、平面弧状を呈する周溝が認められたことから、墳形は円形もしくは南北に長い楕円形と想定され、墳丘の南北規模は10ｍと推定している。平面「Ｌ」字形で石組が遺存していたことから、内部主体は石室であったことは間違いなく、その規模と石積みの状態から、横穴式石室または竪穴系横口式石室と推定される。石室内には副葬品は遺存していなかったが、南および南西側の平坦部を構成している盛土層から古墳時代の土器や石室を構成していたと思われる石材が出土しており、この盛土層が58号墳の墳丘および石室を崩したものを利用していたと想定できた。したがって、58号墳の築造時期は、盛土層出土土器により、古墳時代後期前半と推定している。

経塚と呼称している遺構は、57号墳の西側斜面上部に位置している。円形土壙の山側内端に寄った位置に、平面「コ」字形に石組がなされ、内部に土師器筒形容器を納めたもので、調査時にはかなり破壊を受けていた。土師器筒形容器は丹後地域を中心に但馬地域でも認められるもので、経筒あるいは経筒の外容器と想定されることが多いものであることから、経塚と判断している。詳細な時期は不明であるが、12世紀中頃～13世紀の中世前期と推定している。なお、本経塚を特定するために、宮ノ谷Ⅱ経塚と呼称している。

第２節　検出遺構と出土遺物

１．56号墳（巻頭写真図版４、図版３、写真図版２）

墳　丘

調査区内の標高150.5m前後の最高所で確認調査の際に発見された。56号墳の調査前の状況は、北東－南西方向にのびる長さ約3.5m、幅約1.8mで半月状のほぼ平坦な面が存在していた。しかし、墳丘山側の端は平坦面の存在から想定できたものの、斜面下側にあたる南東側では墳裾と想定できるような傾斜変換部分が全く認められなかった。北東部分についても墳裾と確認できる部分は認められず、南西側の約半分は土取りによると思われる崖面になっていたことからその想定すらできない状況であった。

これらの状況は調査後においても同様で、明確な墳裾は確認できなかった。ただし、調査後の地形測量図によれば、主体部北東側の等高線がわずかに屈曲する部分があり、標高148.5mの等高線を下端とした墳丘を想定することもできる。また、山側は標高151.0mの等高線より上側では急傾斜となっていることから、それらに囲まれた範囲を墳丘部分と想定することができるであろう。

したがって、等高線に直交する北西－南東方向の墳丘規模は約７ｍで、等高線平行方向では主体部中心から北東端まで約５ｍであることから、北東－南西方向の墳丘規模が10m程度であったと想定できよう。このことから、墳丘は平面楕円形を呈し、主体部の位置は墳丘の中心部ではなく、斜面上側に偏った位置であったと判断することができる。

主体部

主体部は推定墳丘中心部より山側にかなり偏った位置にあるが、この状況は当地域における尾根稜線に位置する古墳に通常認められる。

主体部は棺長1.58m、幅45cmの箱形木棺で、すでに腐朽しており、検出面から30cmの深さが確認できた。墓壙は平面長方形の二段墓壙を呈し、長辺2.4m以上、短辺約1.7mの規模で、斜面上側では90cmの深さ、最下までは1.0mの深さがある。棺の主軸方向は北東－南西方向で、等高線と平行である。厳密にはＮ46°Ｅであるが、山東盆地を見下ろす位置で地形に合わせた方向と理解すべきであろう。

棺底には径２cm前後の小さな礫をまばらに敷き、礫床としていた。棺内からは遺存する副葬品は検出されなかった。なお、この副葬品の多少と礫床の粗密状況とは関係するようである。

棺の北東部で、棺長側板のすぐ外側で鉄刀子が１点出土し、切先が北側下方向に向いていた。また、墓壙底に近い高さであったことから、埋葬面で棺外に副葬されたか、棺上に置かれたものが棺の腐朽とともに下方に落ち込んだものであると推定できる。なお、埋葬頭位は不明である。

出土遺物

56号墳から出土した遺物には、副葬品として鉄刀子がある。また、確認調査の際に墳丘部分より土師器片が出土している。

鉄刀子（図版３、写真図版７）

鉄刀子（Ｍ１）は、主体部内の北東部で棺側に接するかたちで墓壙埋土から出土した。出土位置からみれば、棺上に置かれていたものが転落した状況と考えるほうが妥当であろう。

全長11.0cm、刃部長6.9cm、刃部最大幅1.7cmである。刃部の先端のみわずかに欠失する。茎長は4.0cm、最大幅1.2cmで、両関となっている。茎部分には木質が残存するが、表面までは遺存していない。

魚津知克氏によれば、刀子が両関になるのは第９期以降で、須恵器編年ではおおよそＴＫ208型式～ＴＫ47型式の時期併行期以降にみられる（魚津 2000）とのことである。本例の時期は、宮ノ谷57号墳の滑石製勾玉や宮ノ谷58号墳の石室の存在から、ほぼＴＫ208型式期～ＭＴ15型式期におさまるものと推定している。

土　器（図版８、写真図版７）

（３）は土師器高杯の脚部小片で、端部を欠失する。残存高は6.1㎝である。径1.0㎝程度の透孔が確認でき、４方向と推定される。確認調査時に墳頂部にあたる位置の表土下から出土したものである。橙色を呈し、時期的には古墳時代の中期～後期頃と思われるが、本墳に伴うものか否か不明である。

（４）は土師器の甕または壺の口縁部である。口径は15.2㎝で、外反気味に外上方に開いた後、口縁端部をやや内湾させている。内面には微かにヨコハケが残る。焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。墳丘部分の斜面から確認調査時に出土したもので、詳細時期は不明であるが、古墳時代と考えている。

註：魚津知克2000「鉄製農工具副葬についての試論」『表象として鉄器副葬』鉄器文化研究会

２．57号墳（巻頭写真図版５、図版４、写真図版３・４）

墳　丘

調査区内のほぼ中央南西寄りの、標高142～143ｍの位置に存在していた。しかし、調査前の地形観察では墳丘状の盛り上がりが全く認められなかったことから、古墳の存在は予想していなかった。

墳丘の存在が確認できない状況は調査後においても同様で、主体部である箱式石棺の周囲には墳丘と思しき盛り上がりは認められなかった。ただし、築造当初は小規模ながら墳丘が存在していたものが、流失してしまったものととらえている。したがって、墳丘規模や墳形および高さは全く不明である。

主体部

主体部は自然石を使用した箱式石棺で、棺身は板状の石材を組み合わせたものである。蓋石は４石からなるが、棺身上は大きな石３個を使用し、南小口側に小さめの１石を乗せていた。蓋石の下面はほぼ同一面となっていた。棺身のうち、長側は長方形の石を横位に２石並べており、石の間には外側から小さな石を詰めていた。短側石は長方形に近い石を縦位に使用し、深く穴を掘って立てており、長側石が短側石を挟むかたちに組んでいた。ただし、検出時には蓋石と長側石が斜面下側に傾いていた。

棺の主軸方向は等高線と平行の北東－南西方向で、厳密にはＮ36°Ｅであるが、56号墳と同様に山東盆地を見下ろす位置で地形に合わせた方向と理解すべきであろう。

棺身の内法長は75㎝、最大幅25㎝、最小幅22㎝で、その規模から大人の埋葬は不可能であり、幼児を埋葬していた可能性が高い。棺内底面の北端には長辺10㎝強の角礫を２個並べており、石枕と理解できることから、北枕で埋葬されたと判断される。また、棺内南東部の底面から小型の勾玉が検出され、副葬品として棺内に置かれたものと判断できる。蓋石内側面は北側が南側よりも高く、石枕の位置からも被葬者が北東側を頭位とし、棺の規模および副葬品の種類から、被葬者は女児であった可能性がある。

棺内埋土は３層で、上層は10YR7/3にぶい黄橙色のシルト質細砂～中砂、中層は10YR7/4にぶい黄橙色のシルト質極細砂～細砂、下層が10YR6/4 にぶい黄橙色のシルト質細砂となっており、下層上面が石枕および勾玉検出面であることから、棺底と判断できる。棺底から蓋石までの内法高は最大15㎝である。

墓壙は長径1.2ｍ、短径60㎝程度の平面楕円形を呈し、棺側石の部分をさらに深く掘り込んでいる。

出土遺物

57号墳から出土した遺物は、棺内に副葬されていた小型の滑石製勾玉１点に限られる。

勾　玉（図版４、巻頭写真図版５）

全長1.25㎝、全幅1.0㎝、最大厚0.3㎝の小型勾玉で、滑石製である。平面の外郭形状は扁平な楕円形を基調とし、腹部分を抉りこんだものである。平板的で横断面は長方形を呈する。頭部・尾部と腹部との境には稜を残し、ほぼ全面に擦痕が認められる。切断痕および研磨痕の可能性が高い。頭部の孔は径１㎜弱である。色調は10BG4/1の暗青灰色を呈し、やや硬質の感がある。重量は0.56ｇである。

小型ながらも扁平な滑石製勾玉であることから、古墳時代中期後半から後期前半の時期を与えておきたい。

３．58号墳　（巻頭写真図版６、図版５・６、写真図版４・５）

墳　丘

調査区内南東部には平坦な部分が等高線に沿って帯状に存在しており、平坦部の北側は少し高くなっていたが、調査開始時点では平坦部の延長ととらえていた。その東側は急な崖面となっている。

調査の結果、山側を半月状に掘り込んで、三日月状に周溝をめぐらした古墳であることが判明したが、墳丘の東半部は崩落していた。墳形は楕円形のようで、南北規模は現状で9.5ｍを測る。墳丘規模を推定すれば、南北10ｍ、東西７ｍ程度となろう。また、周溝外側での南北規模は12ｍと判断できる。

墳丘は最大高約60㎝遺存しており、周溝底の最大幅は1.4ｍである。墳丘の大半は平坦部の盛土として使用された可能性が高い。

主体部

調査開始時の現状では少量の礫が散乱し、崖方向に向かって東西に並ぶ石列の存在を確認していた。調査の結果、南北方向にも石列が存在し、石列が「Ｌ」字形に確認できたことから、石室の残存部分であることが判明した。石室は大半が崩落しており、東西約1.5ｍ、南北約0.9ｍの内法長で、高さは最大３石分の60㎝が遺存していたにとどまる。壁体は長さ30～50㎝、幅20～40㎝、厚さ15㎝前後とやや小さめの角～亜角礫を小口積みとしており、基底部のみ横位に使用していた。東西石列は奥壁と判断できるが、小さめの礫を小口積みとしていることから、竪穴系横口式石室もしくは横穴式石室でも古いタイプのものと推定できる。このことは、石室奥壁の位置が墳丘の中心近くであることからも首肯できよう。

また、58号墳南側の平坦部から石室壁体に使用されていたと思われる礫が多く出土していることから、平坦部を形成している埋立層出土の古墳時代の土器は本墳に伴っていた可能性が高く、58号墳の時期をあえて推定するならば、古墳時代後期の６世紀前半頃の築造となり、その後追葬が行われたことも想定しておきたい。

出土遺物

58号墳から出土した遺物は認められなかったが、前述・後述のように本墳南側の平坦面を形成する際に、本墳を崩して埋め立て土に利用したことが考えられる。したがって、埋め立て層から出土した遺物のうち、古墳時代に属するものが本墳に属していた可能性がある。

以下では、平坦面出土の古墳時代遺物が58号墳に関連するものとして記述することとしたい。

遺物には１・２・５～９の須恵器、10の土師器がある。古墳時代後期から飛鳥時代の可能性があるも

のが多くを占める

土　器（図版８、写真図版７）

（１）は須恵器坏身の小片で、立ち上がり部はやや内傾するが端部を欠失する。受部外側での直径は15.5㎝である。確認調査時に平坦面の西部から出土したもので、立ち上がり部上端は不明であるが、ＭＴ85型式併行期頃と思われる。（２）は須恵器壺または瓶の口縁端部小片で、口径は12.4㎝である。内外の表面には自然釉が薄く付着している。口縁端部は内傾する面をもち、内側に少し拡張している。確認調査時に平坦面と斜面の境付近から出土したものである。（５）は須恵器坏の底部または天井部の破片で、丸みをもち、外面はヘラケズリを施している。ロクロ回転方向は左回転である。南側斜面と平坦面の表土出土破片が接合したものである。ＭＴ15型式期～ＴＫ43型式期と思われる。（６）は須恵器坏の底部片で、底部外面はヘラ切り後に多方向のハケ状工具でナデをおこなっているようである。底部外周の外面は回転ケズリをおこなっている。平坦面南半部の表土直下から出土したもので、古墳時代終末期の可能性がある。（７）は坏かと推定される須恵器底部片で、外面はヘラ切り後ナデをおこなっている。内面には仕上げナデが認められる。調査区南端部から出土した。時期は不明であるが、古墳時代終末期～奈良時代直前と推定している。（８）は須恵器壺片と推定している。外面は平行タタキの後カキ目を施し、内面には当て具痕が認められる。古墳時代後期と思われる。確認調査時出土と平坦面南半部出土破片が接合したものである。（９）は須恵器横瓶の破片と推定している。外面には平行タタキ、内面にはユビオサエ痕を残す。古墳時代後期頃と思われる。確認調査時出土分と平坦面北半出土分が接合した。

（10）は土師器大型壺の肩部片で、平坦面南半の表土掘削時に出土したものである。古墳時代中期頃の可能性がある。

４．経　塚　（巻頭写真図版７・８、図版７、写真図版６）

検出状況

経塚は57号墳石棺の約３ｍ西側で、標高145ｍ前後の位置に存在する。調査過程で石組み上部を検出したことから、石棺の可能性を考えていた。調査が進むにつれて石組みが石棺状を呈しないことと、中世と思しき土器の出土から、経塚と判断したが、経塚が通常存在する位置とは趣を異にしている。

構　造

平面不整円形の掘形の山側奥部底に土製筒形容器を置き、山側を除いた周りに石を積み上げた構造である。調査時にはかなり破壊され、筒形容器の破片が散乱し、かろうじて底部が原位置を保っていた。

掘形平面形は不整円形で、径約1.1ｍである。深さは斜面山側で90㎝、斜面下側では約10㎝を測り、断面形状は「Ｌ」字形に近い。山側の壁はオーバーハングするように軟質花崗岩盤を掘り込んでいる。

礫は20数点検出したが、上部の殆どが斜面下側の東側を中心に北側・南側へ石組みが引き倒されたような状況を呈し、かろうじて基底部の石のみ「コ」字形に遺存して15～20㎝の空間を形成していた。

底部のみ原位置を保っていた土師器筒形容器は、経筒か外容器かの判断が難しいが、外容器とすれば、経筒は竹などの有機質であった可能性がある。時期的には中世（鎌倉～室町時代）の可能性が高い。

出土遺物

経塚出土遺物は経筒あるいは外容器と推定される土師器筒形容器とその蓋および別個体の筒形容器小

片がある。

土師器（図版８、巻頭写真図版８、写真図版７・８）

蓋（12）は天井部中央を欠失するが、口径21.6㎝、残存高6.1㎝を測る。やや硬質の土師器で、外面中央部には稜をもち、そこを境として上部は太筋の平行タタキ、下部はヨコナデとなっている。稜線部分は成形時の接合部でもある。内面はヨコナデ後接合痕を消すようにヨコハケを加えている。口縁端部はやや厚みを増し、端面は凹面を呈している。

筒形容器（13）も硬質の土師器で、蓋と同質・同色を呈する。器高22.7㎝、口径は15.6㎝で、口縁端部は内側に短く折り曲げたようになっている。体部には粘土紐巻き上げ成形時の接合痕を多く残しており、外面には凹凸が多い。底部は体部から丸みをもって平底となっている。体部外面はタテハケ、体部外面下端および底部外面は蓋と同じ太筋の平行タタキである。口縁部は内外面ともヨコナデによりハケを消している。体部内面は横方向を基調としたハケで、底部にも施している。底部付近にはユビオサエ痕が多く残る。

蓋と身を合わせた際の器高は25㎝程度である。

（11）も筒形容器の破片であるが、（13）とは別個体である。器厚は1.1㎝と厚く、体部径は19.5㎝である。（12・13）よりも軟質で灰色がかっており、外面には幅0.9㎝の凹線状を呈する部分がある。

５．平坦部　（巻頭写真図版３、図版１・２、写真図版６）

検出状況

調査前の段階で、調査区南東部の標高137～138ｍの部分に幅５～６ｍの平坦部が、58号墳の部分も含めて延長約25ｍにわたって三日月形に存在していた。

構　造

表層を掘削して調査した結果、表土下の約10㎝の厚さの5YR5/4 にぶい赤褐色の、花崗岩風化層であるシルト質細砂～中砂の下層には、非常に多量の角礫を含んだ7.5YR6/3 にぶい褐色のシルト質細砂～粗砂が約50㎝の厚さで認められた。この層の下面では平坦面の幅が2.5ｍしかなく、平坦面の幅を確保するために客土により盛り上げたものと推定した。この客土には58号墳の墳丘や石室石材が使用されたと推定でき、層中より古墳時代の土器片が出土している。この層に含まれる礫は非常に多く、花崗岩のみにとどまらないことから、地山に含まれる花崗岩や凝灰質砂岩および58号墳石室石材以外からも搬入されたことが推定できる。あるいは他にも石棺や石室を内部主体とする古墳が存在していたのかもしれない。

なお、調査後の平坦面幅は3.5～5.0ｍである。埋め立て層からは近世染付磁器や寛永通宝が出土していることから、近世以降の所産と考えられる。また、地元の方から、以前は畑地であったとの情報を得ている。

出土遺物（写真図版７）

埋め立て層から出土した遺物のうち、古墳時代に属する土器は58号墳の項で既述した。ここでは寛永通宝を報告する。

径2.5㎝、厚さ1.24㎜の寛永通宝一文銭で、残存状況は良好で文字もはっきりとした美麗品である。

第３章　総　括

第１節　土師器筒形容器について

はじめに

宮ノ谷Ⅱ経塚は、調査時にはかなり崩壊していたが、かろうじて土師器底部とそれを囲む石組が原位置を保っていた。その構造は、平面不整円形土壙底の山側奥部に接して平面「コ」字形の石組みをおこない、石組内部に土師器筒形容器をおさめるもので、横穴は穿っていないものの、森内秀造氏による横口式小石室をもつ経塚（森内1985、森内2011）、杉原和雄氏による「丹後型埋経遺構または遺跡」（杉原2001）、森嶋康雄氏による「横穴付土坑をもつ経塚」（森嶋2003）に分類されるものである。ただし、本例において、森内氏のいわれる石室（石組）が、横口式の構造となっていたか否かについては後世の破壊によりかなり崩壊していたことから判断し難い。いずれにせよ、このような構造形態の経塚は、杉原氏が「丹後型土師製筒形容器」（杉原2001）と呼称されるように京都府丹後地域において多数の類例が分布しており、兵庫県北部の但馬地域においても数例が認められている。

本遺跡では筒形の土師器容器が石組の中におさめられていたが、この形態の土器も丹後地域に顕著に認められ、その数も圧倒的に多い。但馬地域では数遺跡に認められ、兵庫県の丹波・播磨地域においても発見されている。その性格について杉原和雄氏は、京都府北部にあっては骨臓器としての用途を強調（杉原1987、杉原1989）されたが、その後①経筒②経筒を納める外筒③蔵骨器といった３通りの用途（杉原2001）として慎重な判断に変更されている。本例では経塚と判断したが、遺構全体が墓であった可能性を完全に否定するものではない。ただし、土師器筒形容器は埋経の用途としてとらえている。

土師器筒形容器の類例

前回の宮ノ谷古墳群調査の際にも土師器筒形容器が石組とともに検出されている（別府・平田他2010）。宮ノ谷２号墳の第１主体部墓壙北東隅で検出されたＳＫ７は、土壙の東側壁下に一段深く掘った穴に石組を設けたもので、南隣にあるＳＫ２埋土から土師器筒形容器の破片が出土している。身の底部や蓋の天井部にタタキ目は認められないが、口径や蓋口縁部端部の形状が本例のものとよく類似している。14世紀頃と考えられる土師器堝の破片が伴出している。

兵庫県但馬地域では、ほかにいくつかの遺跡で土師器筒形容器が発見されている。

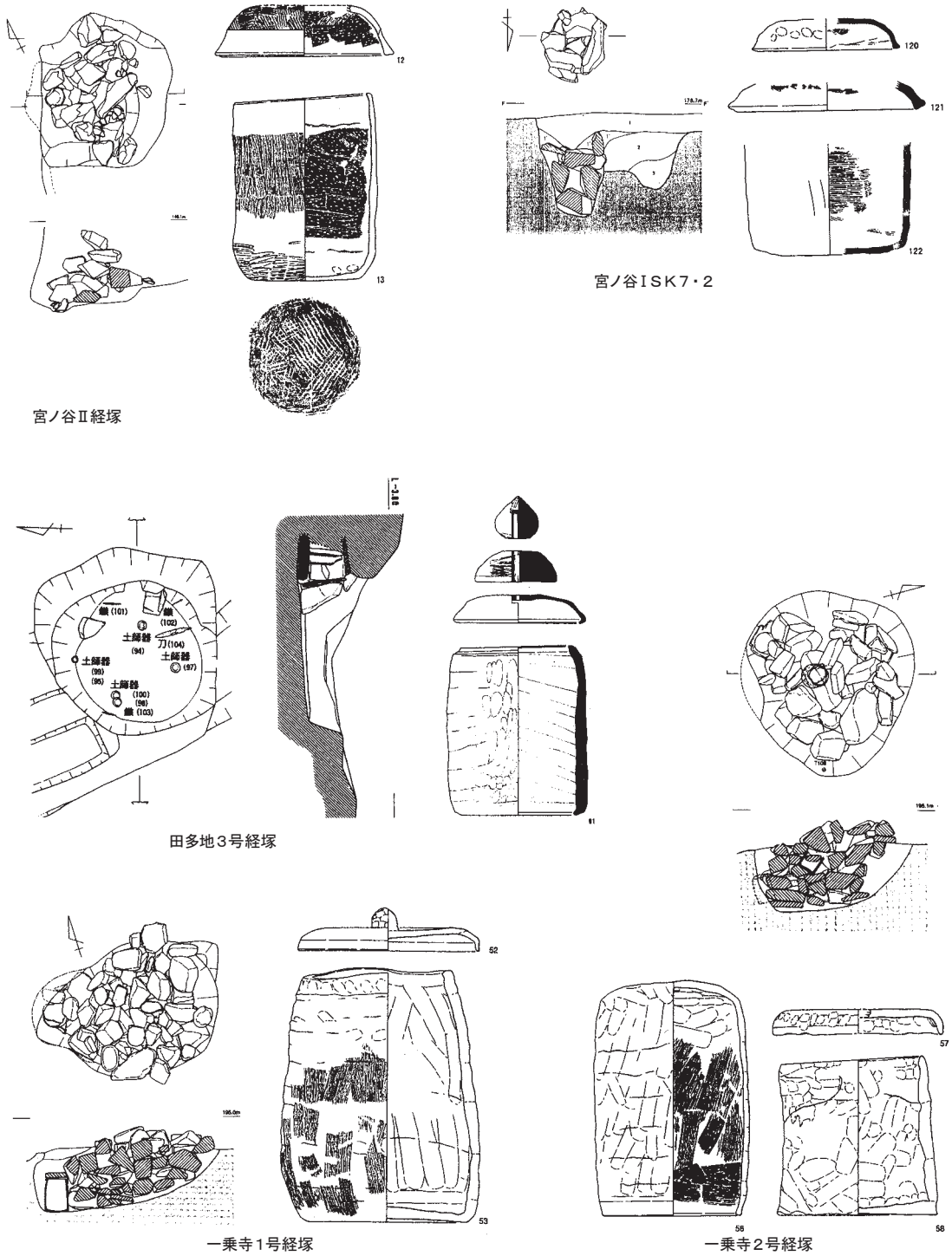
豊岡市出石町田多地３号経塚（森内・別府他1985）は円形土壙の内壁に横穴を穿ち、板石で小石室を設けて土師器筒形土器を納めていた。筒形土器は底をもたず、高さ20.7㎝、口径16.7㎝で、蓋は身と合わせ口になり、口縁端部を内側に折り曲げている。この蓋上には宝珠つまみとつまみの台座が乗る。

豊岡市日高町馬場ヶ先古墳経塚（櫃本他1980）では、土壙は不明であるが、複数の土師器筒形容器が出土している。容器は、蓋と身が合わせ口になるものと、蓋の径が身よりかなり大きく被せた際に蓋側の隙間が多いものの２種が認められる。蓋および身の形態は宮ノ谷Ⅱのものとはかなり異なっている。

養父市八鹿町比丘尼経塚・中世墓群では、比丘尼古墳墳丘上の３号墓（谷本1993）は連接した２つの石室の一方に土師器筒形容器を納めており、片方の石室側から銅銭６枚が出土している。容器身は高さ24.0㎝、口径14.5㎝で、体部外面に人名を焼成前に刻銘している。蓋は高さ3.2㎝を測り、天井部が平らで身にきれいに被さる形態である。宮ノ谷Ⅱの身よりも細長く底部は平らで、蓋も形態が異なる。

朝来市和田山町一乗寺経塚（藤田1999）は、接する３基の竪穴全体を石で覆ったもので、13世紀後半

～14世紀と思われる土師器堝が封石の隙間から出土している。１号経塚は、楕円形の竪穴の一部を横穴状に掘り窪め、土師器筒形容器を置いて板石で塞ぎ、竪穴全体に石を詰めていた。口径18.6cm、器高30.5cmと宮ノ谷Ⅱ例よりかなり大きく、底が平らである。蓋はつまみが付く扁平な形態で、口縁端部は短く真下にのびる。２号経塚も構造的には１号経塚と類似するが、銅製経筒を逆転させた土師器筒形容器で覆っており、詰石中央にも空間を設けて土師器筒形容器を納めていた。経筒を覆っていた外容器は底部が丸く宮ノ谷Ⅱ例に似るが、器高28.8cm、口径16.5cmと大きい。上層の容器は底が平らで器高19.5cm、口



第４図　土師器筒形容器の類例（遺構１：60、遺物１：8）

径17.0㎝、蓋は口径20.1㎝、高さ3.1㎝と扁平で、形態的に宮ノ谷Ⅱ例と大きく異なる。

豊岡市但東町畑森経塚（瀬戸谷他1985）では土師器筒形容器が出土しており、器高23.1㎝、口径17.0㎝で、底がやや丸く口縁端部が内傾する点でも宮ノ谷Ⅱ例に類似するが、端部に幅広い面をもつ。

ほかに豊岡市香住ヱノ田中世墓や養父市関宮町上向田中世墓でも土師器筒形容器が出土している。

土師器筒形容器は土器編年が確立されていない現状があり、形態的にもばらつきが多く、小地域単位に絞ってみても、それぞれで異なる部分が多く共通性が少ない。また、蓋と身の合わせ方でも、合わせ口になるＡ型、蓋口縁部が垂直ですっぽり被さるＢ型、蓋口縁部が下外方にのび、蓋との間隙が多いＣ型に分けることができるが、これも同一遺跡内においてさえばらつきが認められる。

時期的には伴出遺物により13世紀～14世紀が多いと思われるが、丹後地域等では、12世紀第４四半期から13世紀中頃に盛行し、上限が12世紀中頃、下限が15世紀中頃（杉原2001）であるとされている。

おわりに

土師器筒形容器の製作は、広範囲に同一形態が認められないことから、その製作は小地域単位またはさらに小さな単位でまかなわれていたと推定することができた。

時期については限定できる材料に乏しく、丹後地域での検討にもとづき中世前期と推定した。その頃には、これまでいわれているように、埋経の目的が追善供養や現世利益に変化していると考えられ、さらに簡略化されて、本来埋経のためであった土師器筒形容器が蔵骨器としても使用されたのであろう。

このように、土師器筒形容器の用途については、埋経を基本とし、蔵骨器としても利用されていったと想定しているが、遺構全体の機能の検討とともに、また、土師器筒形容器が経筒そのものか外容器かという問題についても紙数および時間の都合から検討できなかった。これらは今後の課題としたい。

なお、本文で扱った資料の類例の多くは、2001年12月におこなわれた『第19回但馬考古学研究会・両但考古学研究会交流会資料集－中世土器と経塚・古墓－』に負うところが大きい。

本文を記述するにあたり、森内秀造氏より資料の提供とともに多くのご教示を賜った。

参考文献

杉原和雄 1987「経塚遺構と古墓」『京都府埋蔵文化財論集』第１集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
杉原和雄 1989「経塚と墳墓」『考古学雑誌』第74巻第４号　日本考古学会
杉原和雄 2001「近年調査された京都府北部出土の土師製筒形容器とその遺跡について－経塚と墳墓を考える－」『京都府埋蔵文化財論集』第４集－創立20周年記念誌－（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
瀬戸谷晧他 1985『但東町の埋蔵文化財』（２）　但東町教育委員会・但馬考古学研究会
谷本　進 1993「６世紀の墓制からみた宿南びくに古墳」『但馬考古学』第７集　但馬考古学研究会
櫃本誠一他 1980「考古編」『日高町史資料編』
藤田　淳 1999「一乗寺経塚の調査」『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告 第191冊　兵庫県教育委員会
別府洋二・平田博幸他 2010『寺山古墳群 宮ノ谷古墳群 諏訪城跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告 第378冊　兵庫県教育委員会
森内秀造 1985「田多地経塚群について」『田多地古墳群　田多地経塚群Ⅰ』出石町文化財調査報告書 第２冊　出石町教育委員会
森内秀造 2011「兵庫県但馬地方を中心とした経塚の概観」『経塚考古学論考』安藤孝一編　岩田書院
森内秀造・別府洋二他 1985『田多地古墳群 田多地経塚群Ⅰ』出石町文化財調査報告書 第２冊　出石町教育委員会
森嶋康雄 2003「京都府北部の経塚」『平成15年度国立歴史民俗博物館 経塚データベース会議発表資料』

第２節　56 号墳主体部礫床礫の石材同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

宮ノ谷古墳群は、兵庫県朝来市柊木に所在しており、古墳時代中期～後期初頭の年代を示す。そのうち、宮ノ谷56号墳は、古墳の主体部に木棺がおさめられて、棺床に礫がまばらに散乱していた。本報告では、棺床礫の石材に関するデータを得るとともに、遺跡周辺地質との関連について記述する。

２．試料

試料は、宮ノ谷古墳群の56号墳の、木棺の礫床サンプルである。礫は、径15-30mmを有し、亜円礫～円礫様を呈する礫８点である。

３．分析

野外用ルーペや実体顕微鏡を用いて、石材表面の鉱物や構成組織を観察し、岩石名を付した。鑑定対象とした試料の写真撮影を行った。

４．結果

鑑定結果を第２表に示す。なお、写真は、第５図に示した。

試料17は砂岩、試料18はチャート、試料19は輝石安山岩（新第三紀）、試料20は変斑れい岩、試料21は千枚岩、試料22は千枚岩、試料23は砂岩、試料24は砂岩に鑑定された。

第２表　石材鑑定結果

資料番号	石材
17	砂岩
18	チャート
19	輝石安山岩 (新第三紀)
20	変斑れい岩
21	千枚岩
22	千枚岩
23	砂岩
24	砂岩

５．考察

宮ノ谷古墳群は、朝来市内山東町柊木集落の西側山塊に所在する。棺の礫床には、古墳近傍の河床礫や、完新世の沖積層に含まれる礫を、入手していたと推定されるため、宮ノ谷古墳群周辺の地質の把握が重要である。以下、地質の記述は、20万分の1地質図幅「姫路」(猪木,1981)による。

宮ノ谷古墳群が所在する朝来市周辺には、二畳紀の舞鶴層群および丹波層群が分布している。舞鶴層群は、粘板岩質泥岩、砂岩、チャート、石灰岩、酸性凝灰岩および塩基性火山岩から構成される。丹波層群は、千枚岩質粘板岩、砂岩、チャート、石灰岩および塩基性火山岩といった、舞鶴層群とほぼ同様の岩石から構成されている。古墳群近傍を流下する、与布土川上流域には、三畳紀の角閃石斑れい岩、輝石斑れい岩、輝緑岩様斑れい岩といった、斑れい岩類から構成される夜久野型複合岩体が分布している。このほか、白亜紀-古第三紀の花崗閃緑岩、白亜紀-古第三紀の流紋岩、デイサイト、安山岩などの火山岩類から構成される相生層群が分布する。

試料17、23、24の砂岩、試料18のチャート、試料21、22の、千枚岩は、舞鶴層群や丹波層群を構成する堆積岩類に由来する石材と推定される。試料19の輝石安山岩(新第三紀)、試料20の変斑れい岩は、それぞれ、相生層群に、夜久野型深成岩類に由来し、在地性石材と考えられる。

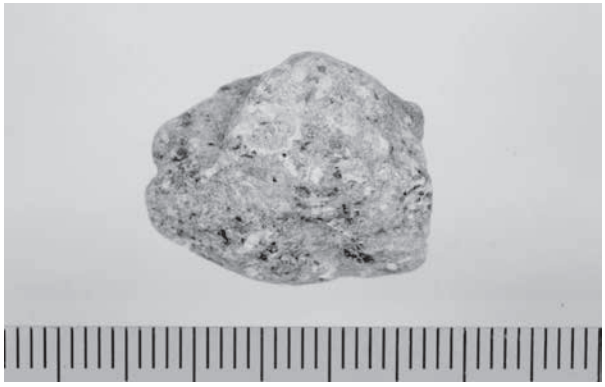
いずれの石材も、本遺跡近傍において、容易に入手可能な石材と考えられる。

引用文献

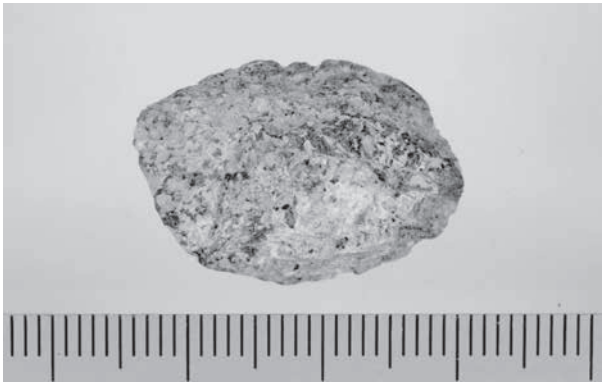
猪木幸男,1981,20万分の1地質図幅「姫路」,地質調査所.

1.試料17 砂岩

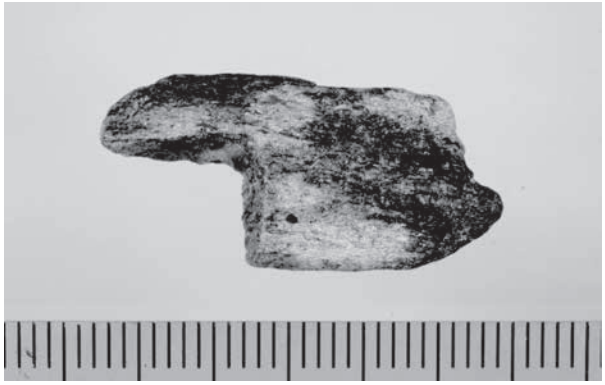
2.試料18 チャート



3.試料19 輝石安山岩(新第三紀)



4.試料20 変斑れい岩



5.試料21 千枚岩

6.試料22 千枚岩

7.試料23 砂岩

8.試料24 砂岩

第 5 図　宮ノ谷 56 号墳主体部礫床礫石材

第3節　総　括

今回の調査の結果検出した古墳３基（宮ノ谷56～58号墳）は、いずれも古墳時代中期～後期初頭（５世紀後半～６世紀前半）に築造されたもので、埋葬施設は木棺・石棺・石室とバラエティーに富み、宮ノ谷57号墳の石棺は子供を埋葬したものである可能性が非常に高い。

木棺を内部主体としていた56号墳は、棺外副葬と思われる鉄刀子の型式が示す時期により、須恵器編年ではおおよそＴＫ208型式～ＴＫ47型式の時期併行期以降にみられることから、古墳築造の時期は、ほぼＴＫ208型式期～ＭＴ15型式期におさまるものと推定している。小規模な箱式石棺を内部主体としていた宮ノ谷57号墳では、墳丘はほとんど認められなかったが、石棺内に枕石と小型ながらも扁平な滑石製勾玉が副葬されていた。築造時期は古墳時代中期後半から後期前半の時期を与えておきたい。小規模な石棺は、山東盆地内の若水古墳群東地区の調査の際に若水古墳群Ｂ支群中の斜面において10基がほぼまとまって存在していた（岸本編2009）。小石を使用して石棺としたもので、内法はすべて70㎝以下であり、斜面山側に周溝を伴っていたことから、極めて小規模な盛土が存在していた可能性がある。一方、宮ノ谷57号墳の石棺は通常のものと較べても使用石材の大きさに遜色がなく、若水古墳群Ｂ支群中の小石棺群とは異なって単独で存在している。したがって、女児であっても通常の古墳のように埋葬されているのである。このような例は芝花古墳群14号墳（岸本編2008）においても認められる。

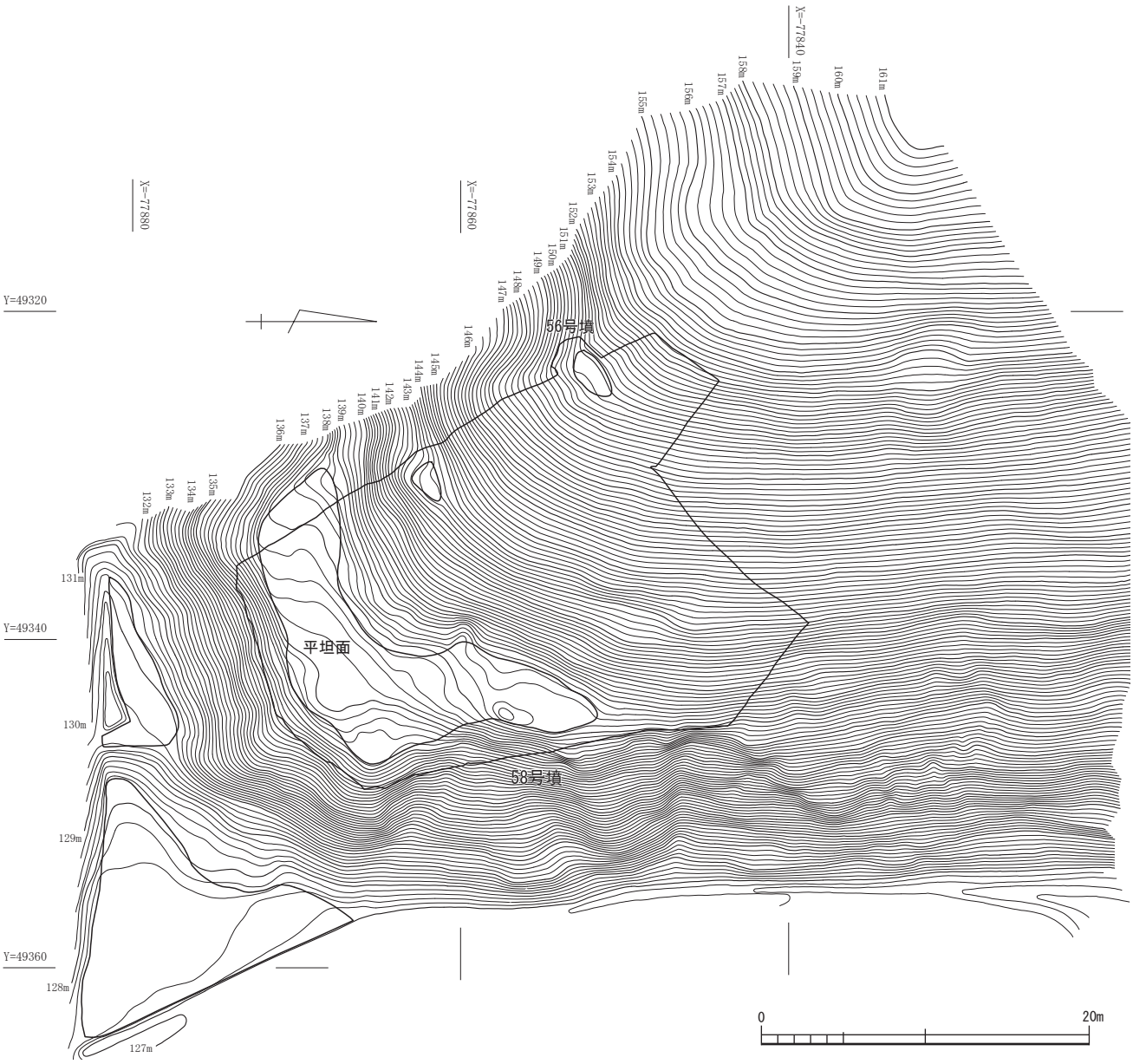
横穴式石室または竪穴系横口式石室を内部主体とする宮ノ谷58号墳は、平坦部出土土器から６世紀前半頃の築造で、その後追葬が行われたことも想定した。宮ノ谷58号墳は東半分が地滑りにより崩落していたが、山東盆地内でこのような例は芝花11号墳（岸本編2008）や若水城跡の帯曲輪（岸本編2009）などで確認でき、花崗岩の風化土という軟弱地盤に起因しているものと思われる。

本古墳群は山東盆地内の西部平坦部に面して西側からのびる尾根陵線上に位置している。古墳時代中期の但馬地域においては、調査区の北東約1.2㎞に但馬地域を治めた首長居館の可能性が高い柿坪遺跡が存在し、その首長の奥津城が史跡茶すり山古墳である可能性も指摘しうる。山東盆地平野部縁辺に多数存在する、宮ノ谷古墳群をはじめとした古墳時代中期に築造された古墳の被葬者は、当時の但馬王を支えた有力氏族であった可能性が考えられ、今回調査した古墳についても例外ではなかろう。このことは、宮ノ谷57号墳のように子供を厚葬していることからも推定できるものと思われる。

宮ノ谷57号墳の主体部内には疎らながら礫床が認められた。礫床に使用されるのは円礫であり、礫がもつ意味の一端でも明らかにするために産地同定をおこなった。その結果、朝来市周辺に存在する舞鶴層群と丹波層群、および与布土川上流域に分布する夜久野型複合岩体や相生層群に含まれる石材が混在しており、近傍において容易に入手可能な石材であった。今後、諸例の分析によって、採取地の偏りがあるのか、それとも近隣で採取できる石材でまかなわれているのかが明らかになることを希望する。

宮ノ谷Ⅱ経塚で出土した土師器筒形容器について検討した結果、広範囲に同一形態が認められないことから、その製作は小地域単位またはさらに小さな単位でまかなわれていたと推定することができた。また、時期については限定できる材料に乏しいことから、丹後地域での検討にもとづき中世前期と推定した。土師器筒形容器の用途については、埋経を基本とし、蔵骨器としても利用されていったと想定したが、その検証も含め、遺構全体の機能の検討など今後の課題なった部分も多く残った。

岸本一宏編 2008『芝花弥生墓群・古墳群』兵庫県文化財調査報告 第345冊　兵庫県教育委員会
岸本一宏編 2009『若水古墳群・城跡』兵庫県文化財調査報告 第364冊　兵庫県教育委員会



宮ノ谷古墳群　調査区位置・調査前地形測量図

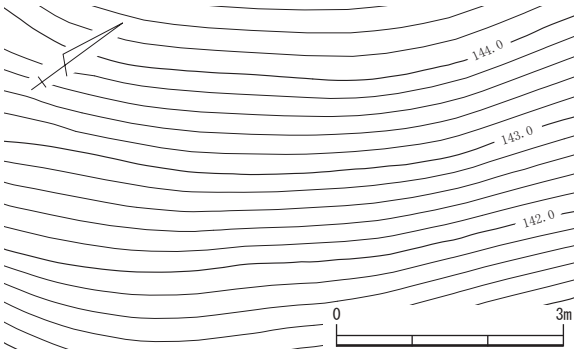
図版 2

宮ノ谷古墳群　調査後全体図

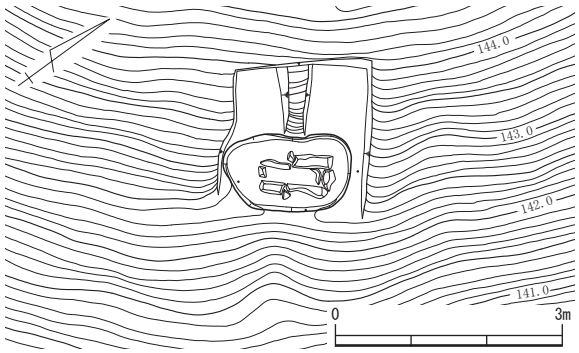
調査前墳丘

調査後墳丘

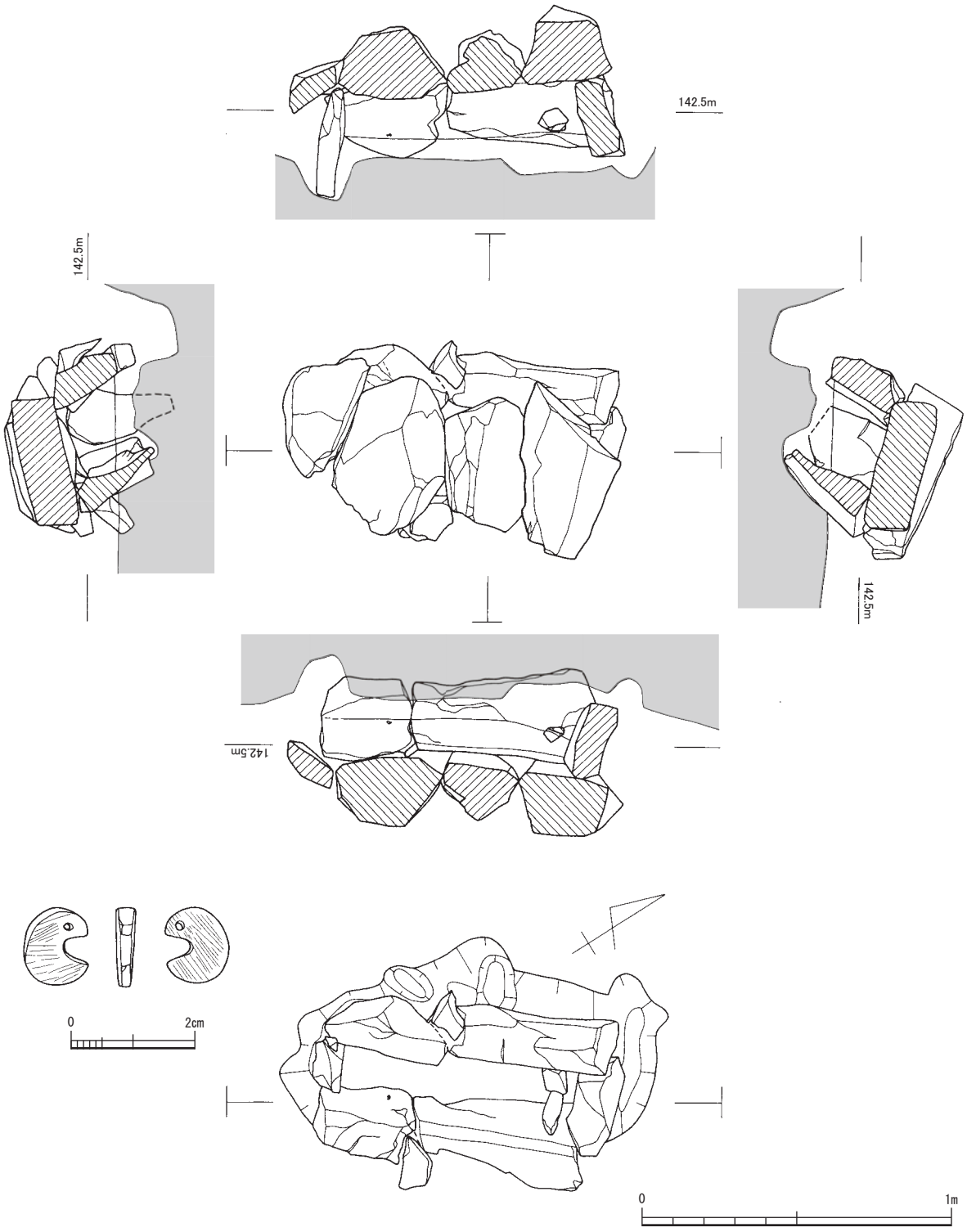
1. 10YR7/4 にぶい黄橙色 シルト質細砂～粗砂 風化礫混 やや土壌化
2. 10YR7/3 にぶい黄橙色 シルト質細砂～中砂 風化礫混
3. 2.5Y7/4 浅黄色 シルト質細砂～粗砂
4. 10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト質細砂～中砂 花崗岩風化土
5. 10YR6/3 にぶい黄色 シルト質細砂～中砂 礫混じる 土壌化 棺埋土
6. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト質細砂～中砂 礫少量混じる 墓壙埋土
7. 2.5Y7/3 浅黄色 シルト質細砂～粗砂 墓壙埋土
8. 10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト質細砂 棺内埋土
9. 10YR7/3 にぶい黄橙色 シルト質細砂 細礫少量混じる 棺底部礫床直下埋土



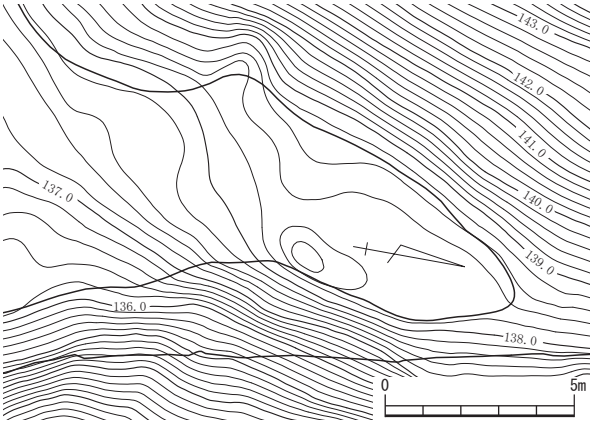
調査前墳丘



調査後墳丘

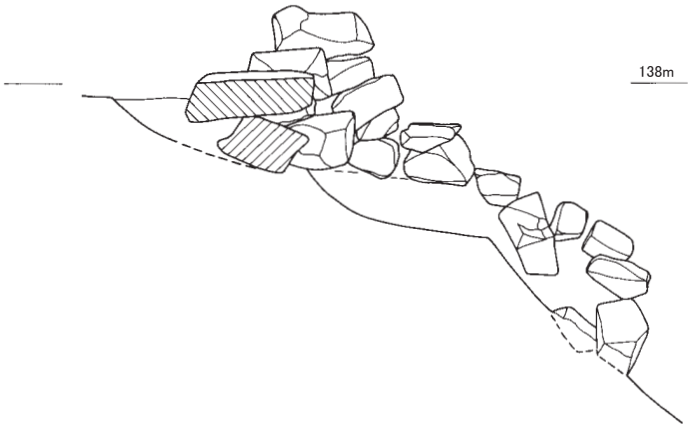


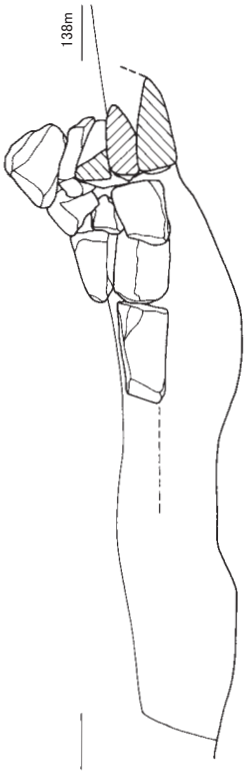
宮ノ谷 57 号墳

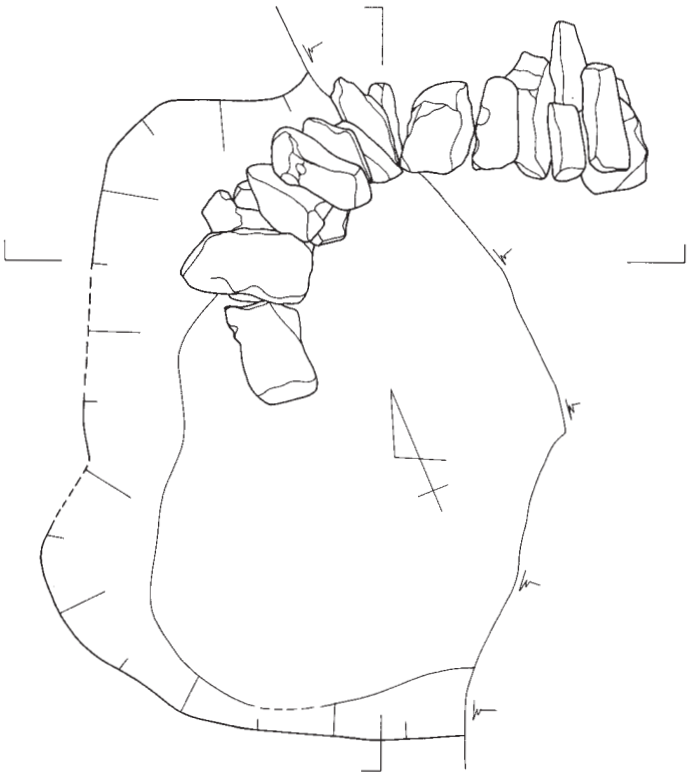


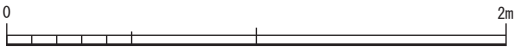
調査前墳丘

調査後墳丘

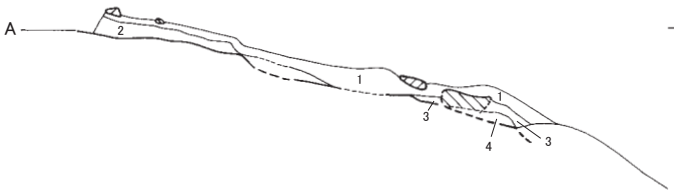




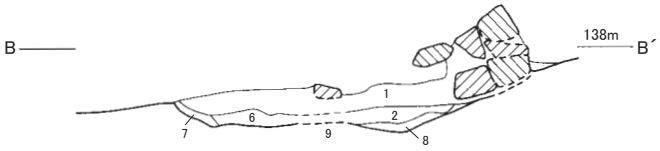


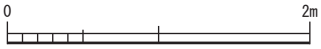


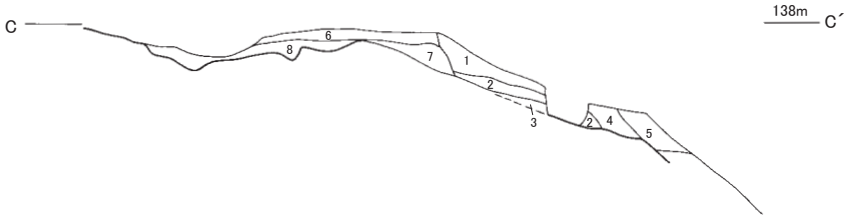
宮ノ谷 58 号墳（1）

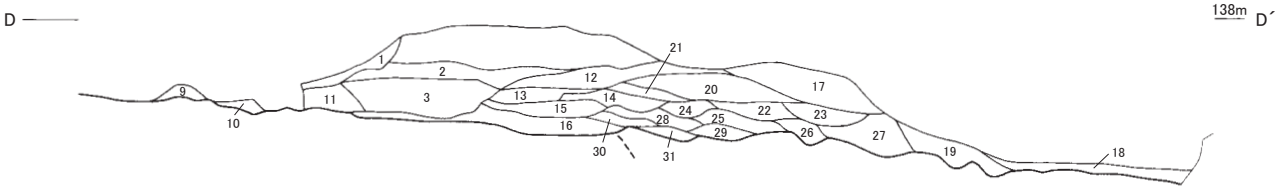


1. 2.5Y6/4　にぶい黄色　シルト質細砂～細礫
2. 10YR6/6　明黄褐色　シルト質細砂～中砂
3. 10YR6/3　にぶい黄橙色　シルト質細砂　やや土壌化
4. 10YR6/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂～中砂　風化岩盤か
5. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質極細砂～中砂
6. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質細砂　やや土壌化
7. 10YR6/4　にぶい黄橙色　シルト質極細砂～中砂
8. 10YR6/6　明黄褐色　シルト質細砂　細礫混

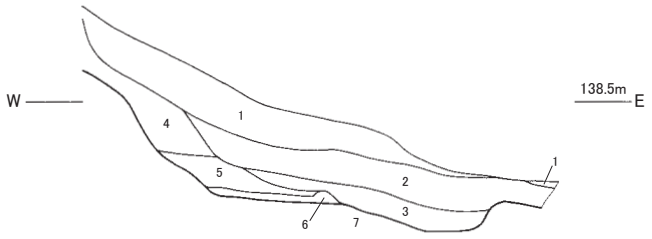




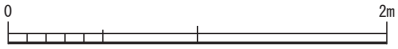




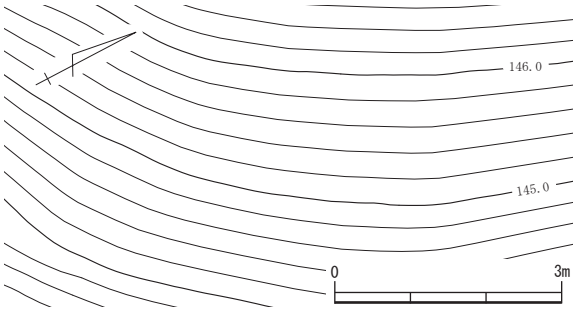
1. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質細砂～粗砂　細礫混　土壌化　墓壙埋土
2. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質極細砂～粗砂　岩盤片混
3. 10YR6/4　にぶい黄橙色　細砂　風化岩盤か
4. 7.5YR5/3 にぶい褐色　シルト質細砂～粗砂
5. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト質細砂～中砂　細礫混
6. 10YR5/3　にぶい褐色　シルト質細砂～中砂　細礫混
7. 10YR6/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂～中砂　細礫混
8. 2.5Y6/4　にぶい黄色　シルト質細砂　風化岩盤か
9. 10YR7/3　にぶい黄橙色　シルト質細砂～細礫　岩盤風化土
10. 10YR6/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂～細礫　岩盤風化土混
11. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質細砂～中砂　岩盤片混
12. 10YR6/4　にぶい黄橙色
13. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質細砂～細礫
14. 10YR6/6　明黄褐色　シルト質細砂　岩盤多く混
15. 10YR6/3　にぶい黄橙色　シルト質細砂～中砂　ベース土混
16. 10YR4/1　褐灰色　シルト質細砂　クロボク多く混
17. 2.5Y5/2　暗灰黄色　シルト質極細砂～細砂　礫少量混　ベース土少量ブロック混
18. 2.5Y4/1　黄灰色　シルト質細砂　クロボク・ベース土ブロック状に混
19. 第17層と同一か
20. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質細砂　細礫混　ベース土多く混
21. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質極細砂～中砂　細礫混　クロボク少量混
22. 2.5Y5/2　暗灰黄色　シルト質細砂　ベース土ブロック状に混
23. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質細砂～中砂　ベース土・クロボク混
24. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質細砂　クロボク・ベース土混
25. 7.5YR5/2 灰褐色　シルト質極細砂～細砂
26. 7.5YR5/2 灰褐色　シルト質極細砂～細砂　ベース土・クロボク混
27. 7.5YR5/2 灰褐色　シルト質極細砂～細砂　ベース土ブロック状に混
28. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト質細砂～中砂　クロボク混
29. 10YR6/4　にぶい黄橙色　シルト質極細砂～細砂　細礫混（ベース土）
30. 10YR7/6　明黄褐色　シルト質細砂　ベース土ブロック混
31. 第28層と同一　礫混
32. 10YR6/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂　岩盤片混
33. 軟質花崗岩盤



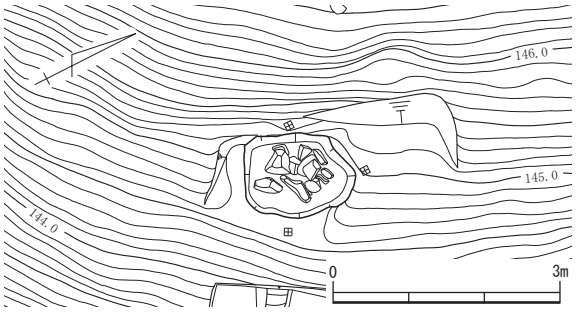
1. 10YR7/6 明黄褐色　シルト質細砂～細礫　岩盤風化土
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色　シルト質細砂～中砂　細礫混
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色　シルト質細砂～粗砂　礫少量混　土壌化
4. 10YR6/4 にぶい黄橙色　シルト質細砂～中砂
5. 10YR7/4 にぶい黄橙色　シルト質細砂～中砂
6. 10YR8/4 浅黄橙色　シルト質粗砂・細礫　風化岩盤礫
7. 花崗岩盤



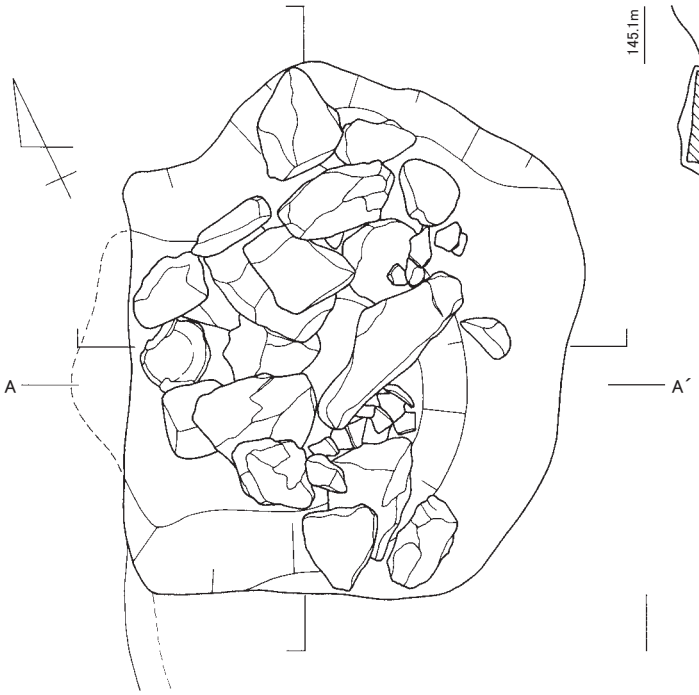
宮ノ谷 58 号墳（2）

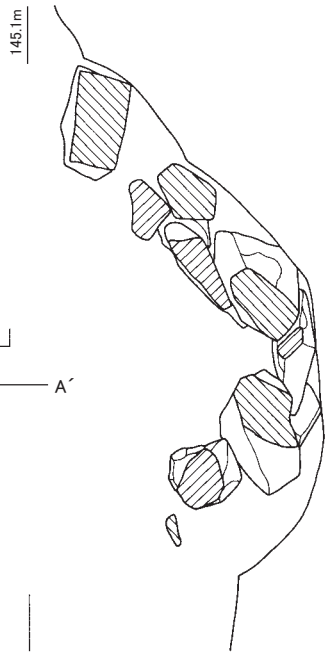


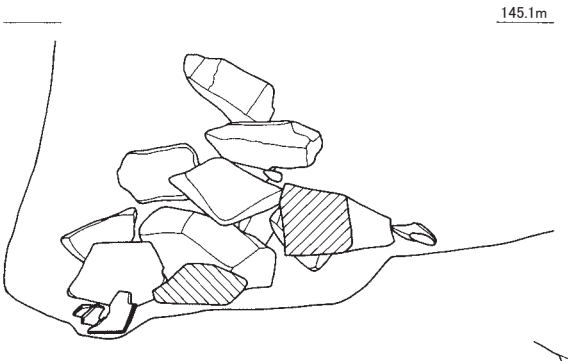
調査前地形

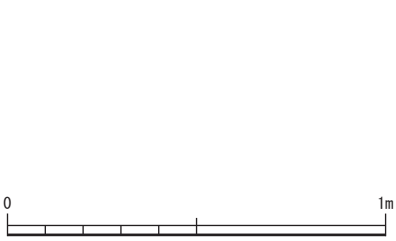


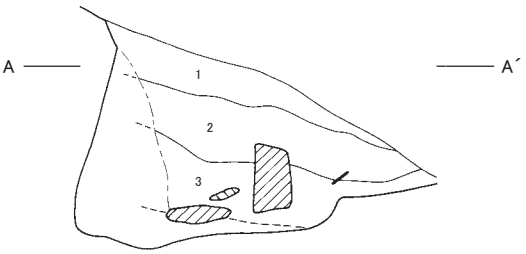
調査後地形



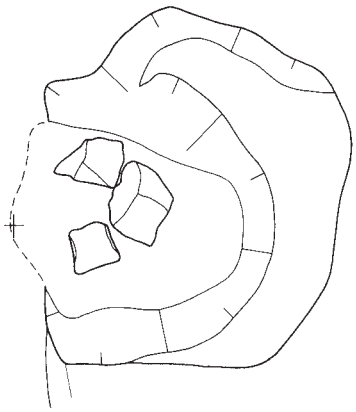




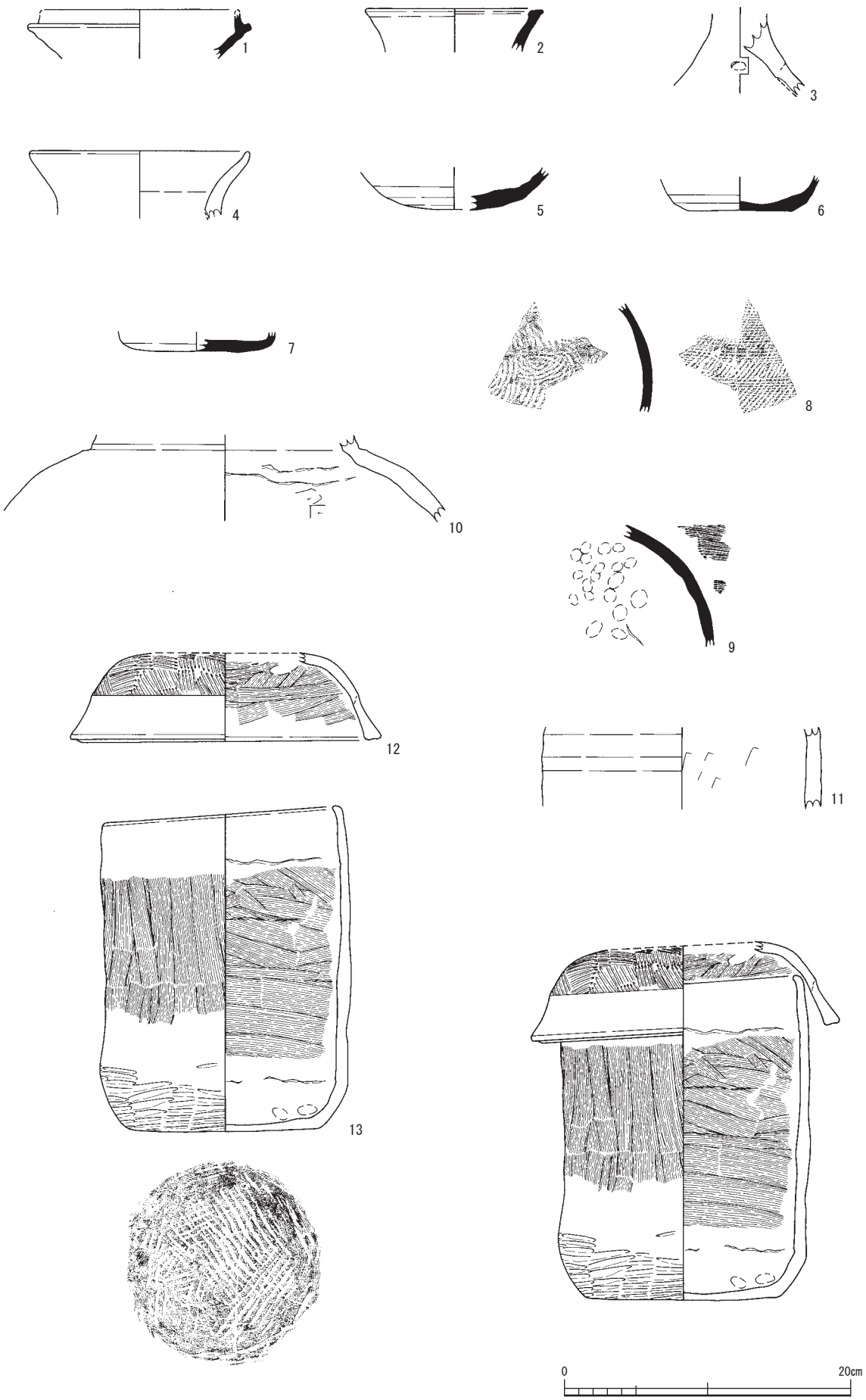




1. 10YR6/6 明黄褐色　シルト質細砂
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色　シルト質細砂　細礫混
3. 10YR6/3 にぶい黄橙色　シルト質極細砂～細砂



宮ノ谷Ⅱ経塚



出土土器

調査前全景（東から）

調査前全景（南から）

調査後全景（真上から・右が北）

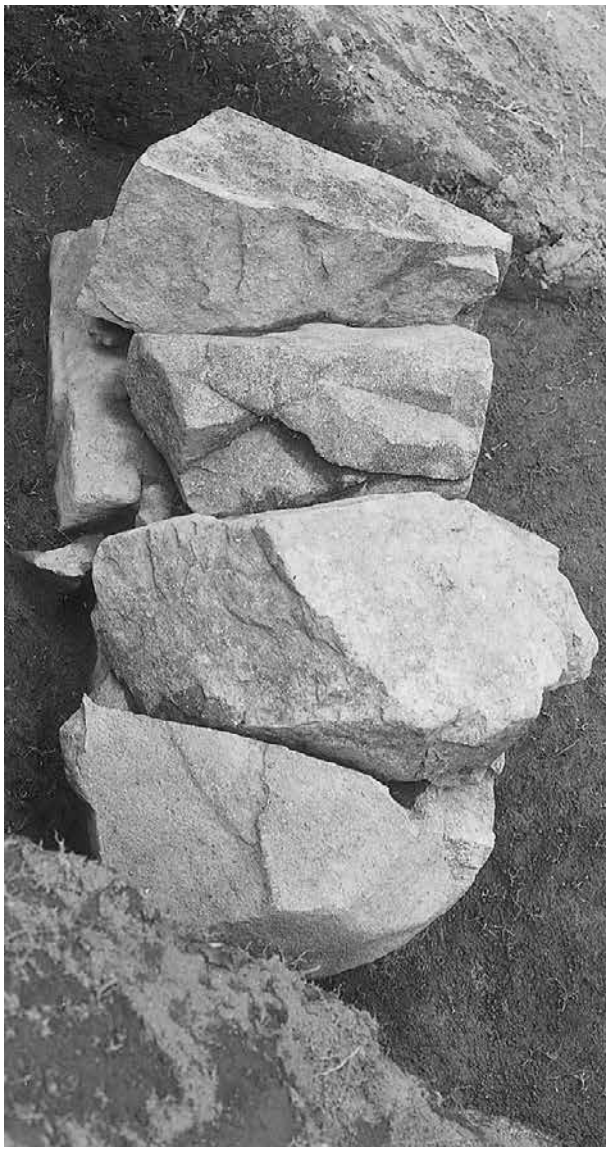
56号墳主体部（東から）

①56号墳主体部埋土断面（北から）

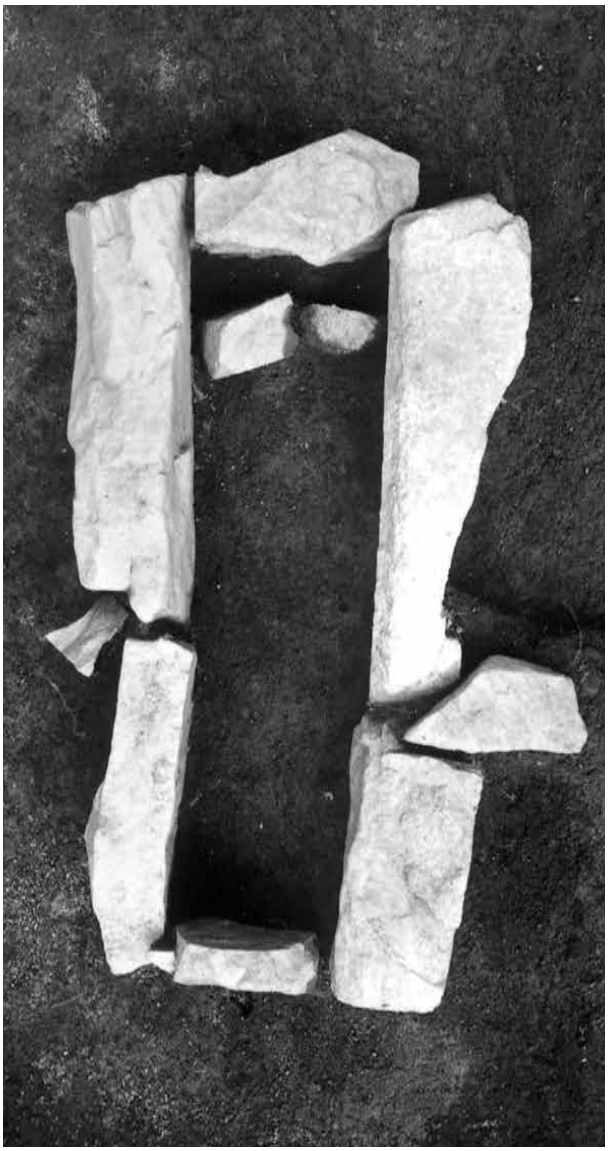
②56号墳墓壙内鉄器出土状況（北から）

③56号墳刀子出土状況詳細（西から）

④56号墳墓壙全景（北から）



①57号墳石棺蓋石の状況（南から）



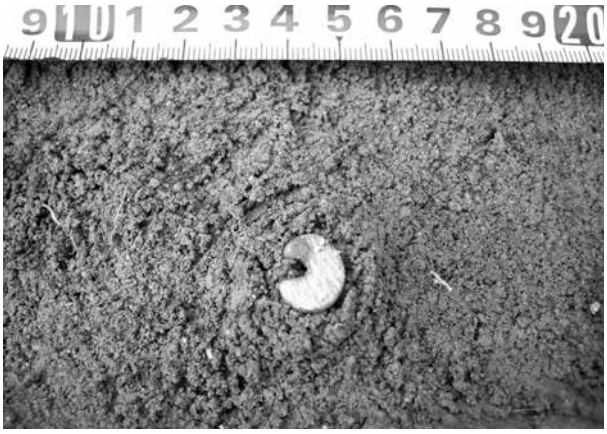
②57号墳石棺身全景（南から）

③57号墳石棺北側短側石（南から）

④57号墳石棺南側短側石（北から）

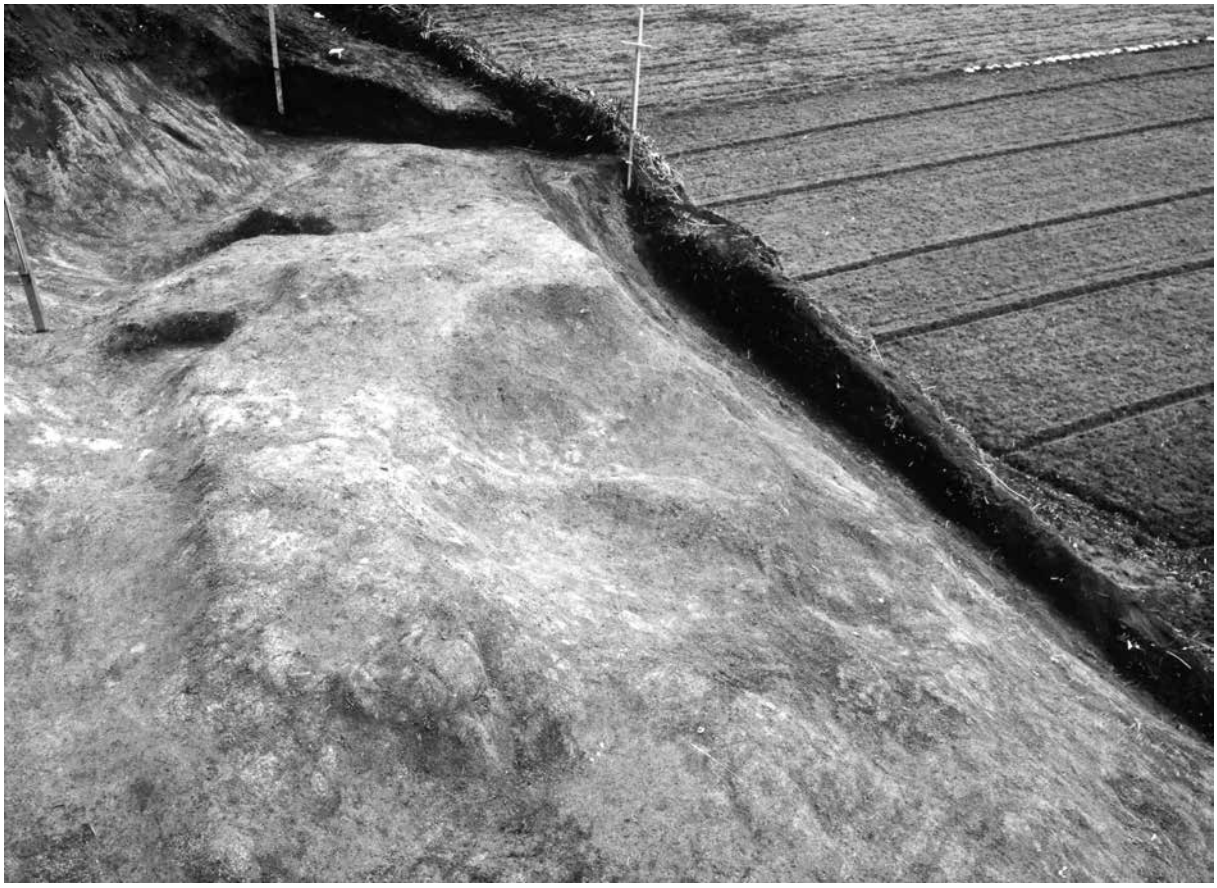
①57号墳石棺蓋石除去直後の状況（西から）

②57号墳石棺外側の状況（西から）



③57号墳石棺内勾玉出土状況（東から）

④57号墳墓壙全景（西から）



58号墳墓壙全景（南から）

①58号墳周溝埋土断面（南東から）

②58号墳石室石材散乱状況（南から）

③58号墳石室壁体遺存状況（東から）

④58号墳石室壁体（南から）

⑤58号墳石室壁体（南側低位置から）

⑥58号墳墳丘断割り状況（南東から）

⑦58号墳墳丘北側断割り断面（東から）

⑧58号墳墳丘除去後全景（南西から）

①経塚掘形底部付近の礫（南東から）

②経塚掘形全景（北東から）

③平坦部断割り断面（西から）

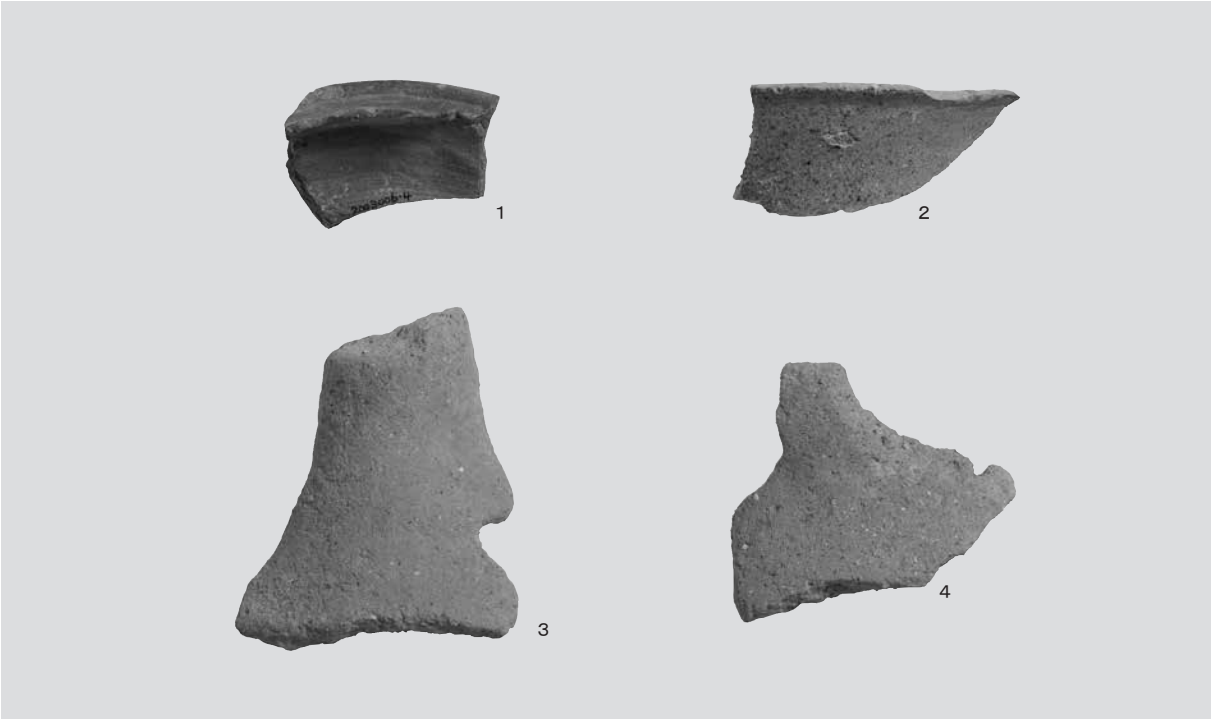
④調査前全景（北東から）

⑤人力掘削状況（北西から）

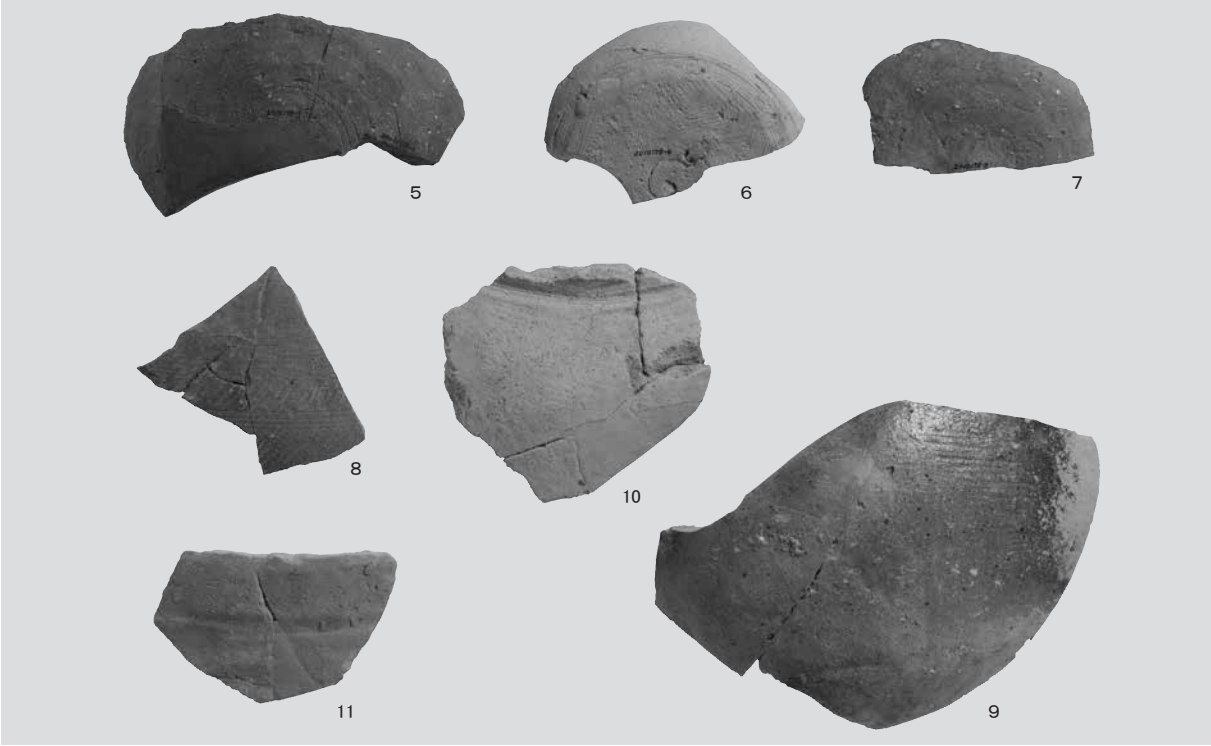
⑥57号墳石棺実測状況（西から）

⑦地元説明会開催状況（北西から）

⑧掘削工事完了後の状況（南から）



出土土器（1）



出土土器（2）

56号墳主体部出土鉄刀子

平坦面出土古銭

経塚出土土師器筒形容器・蓋

朝来市　　兵庫県文化財調査報告　第445冊

宮ノ谷古墳群 Ⅱ

－県道改良事業　一般県道檜倉山東線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－

平成25（2013）年3月28日　発行

編　集　公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部
〒675-0142　加古郡播磨町大中1丁目1番1号
（兵庫県立考古博物館内）

編　集　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　富士高速印刷株式会社
〒679-4232　兵庫県姫路市林田町上伊勢962-3